

インターネットを利用した新語・流行語研究の可能性

— 「Twitter」の蔑称の拡散過程の検証を例として —

Possibility of conducting research on neologisms / words in fashion using the Internet
: A Case study of Diffusion Process of Derogatory Terms of “Twitter”

岡 田 祥 平

OKADA Shohei

1. はじめに

2013年夏、Twitter（ツイッター。詳細は4. 節の議論なども参照）上で、社会通念上、不適切な行為の写真をアップする若者が続出した。そのような風潮のなか、2013年8月31日の「msn産経ニュース」に、以下のような記事が掲載された（以降、紹介した用例中における本稿の考察対象語には下線を引く）。

(1)見出し： 「バカッター」の夏 個人に託された「公器」の危うさ

8月も残すところ数日だが、この夏は「バカッターの夏」として記憶されるかもしれない。国家公務員から未成年の少年たちまで、ツイッターやフェイスブックに代表される交流サイトの書き込みが問題化するケースが後を絶たないためだ。愚か者が正体を現すという意味で「バカ発見器」「バカッター」の異名も持つツイッター。日本は大丈夫なのか。

<http://sankei.jp.msn.com/affairs/news/130830/crm13083008250006-n1.htm>

筆者はこの記事を見て、Twitterの蔑称である「バカッター」、「バカ発見器」（あるいは「馬鹿発見器」）。以下、原則として双方の表記を代表させて「バカ発見器」と表記する。ただし、用例に言及する際にはその限りではない」という俗語が、一般紙の（インターネット上の）記事に登場したことに喫驚した。カギ括弧付きの形であるとはいえ、「バカッター」という極めて俗語性が強い語が、俗語が掲載されることが極めて少ないと思われる一般紙に登場するとは思ひもしなかったからである。と同時に、この語が、どのような過程を経て、一般紙に登場するに至ったかが気になった。

そこで、本稿では、Twitterのことを指す蔑称である「バカッター」「バカ発見器」という語（以下、この2語を指して「Twitterの蔑称」と表記する）が、いつ、どこで生まれ、どのような過程を経て、一般紙に掲載されるようになったのかを、インターネットを利用して調査を行い、素描することにした。具体的には、インターネット上で利用可能な新聞・雑誌記事データベース、「Yahoo! 知恵袋」（インターネット上の質問サイト。<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>）、ブログ、Twitterという異なる言語資料性を持つと想定できる¹⁾ 各種文書を対象に、Twitterの蔑称の初出時期と、初出時期における用例の実態の検討を行う。また、この作業を通して、インターネットを利用した新語・流行語研究の可能性や、インターネット上に存在する種々の文書の言語資料性を（再）検討することも目的とする。

本稿では、まず、2. 節で、インターネットを利用した日本語研究をめぐる先行研究の確認と、筆者の立

場を示す(岡田祥平2013で述べた事項と重複する)。続く3.節では、本稿の分析対象であるTwitterの蔑称が、新語収集の対象になっている／きたかを、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)を利用し確認する。そのうえで、4.節以降で実際の分析、考察結果の報告を行う。4.節では本調査の対象について、5.節では調査方法について、それぞれ説明を加える。そして、6.節では「バカッター」という蔑称を、7.節では「バカ発見器」という蔑称を、それぞれ調査した結果を報告し、8.節で調査結果のまとめを行う。最後に9.節で、今後の課題を述べる。また、10.節では、補説として、本稿の分析結果を踏まえ、インターネットを利用した言語研究、中でも新語・流行語研究の可能性について、再検討を行った。

なお、本稿では、Twitterの蔑称を扱うという性質上、「バカ」「馬鹿」と不快感を催す単語が頻出することは勿論、本稿で紹介する用例にも社会通念上、適切で無い表現が含まれるものがあることを、予めお断り申し上げる。ただし、筆者としては純粋に学術、研究上の意図しかないことを付記させていただく²⁾。

2. インターネットを利用した日本語研究について

岡田(2013)でも詳しく論じたが、インターネットが登場以降、日本語研究者は、日本語研究の用例収集の手段としてインターネットが利用できないか、模索を続けてきた。その過程で明らかになった、インターネットを利用して用例を収集する方法の問題点も、既にいくつも指摘されている(岡島昭浩1997、田野村忠温2000、田中ゆかり2003、荻野綱男ほか2005、前川喜久雄2007、荻野綱男2007・2008、滝沢直宏2007、荻野綱男ほか2007、石川慎一郎2008、前田広幸2011など)が、インターネットを利用して用例を収集する方法の問題点ひとつとして、前川(2007)は、以下のような点を指摘している。

(2)所与の文書の出典情報。特にジャンル情報(新聞記事か小説か論文か、論文なら領域は何か)をあらかじめすることができない。また文書の著者の社会的属性(性別、年齢など)を知ることができない。そのため、言語学的な偏りを評価できない。

また、前田(2011)も、インターネットの文章は「多様性・混雑性」という特性があり、その「多様性・混雑性」は「様々な日本語変種で用いられる用例が含まれているという点で長所にもみえそうであるが、特定の母集団を想定できない雑多なデータの寄せ集めで、また必ずしも種々の変種からサンプルをバランスよく含むとは限らない」と指摘している。

一方、荻野(2007)は以下のように述べ、前川(2007)や前田(2011)が指摘する点は、必ずしも問題にはならないとの立場に立つ。

(3)今までの言語研究だって、実は、テキストそのものだけでなく、その回りのさまざまな情報を集めてジャンルや書き手について調べてきたのである。WWWコーパスでそれができないはずはない。ただ、WWWが膨大な言語量があるために、全部の用例についてこのような調査をするのは大変だということだけのことである。

筆者は、上に引用した荻野(2007)とは異なる立場から、すなわち、インターネットで検索を行う際、検索の対象を限定するという工夫を施すことによって、前川(2007)が指摘する懸念は、ある程度は解消できると考えていると、岡田(2013)で述べた。その上で、岡田(2013)では、インターネットを利用した用例収集の可能性を模索した先行研究を参照しつつ、インターネット上の文書を、対象を限定して検索し、日本語研究の用例を収集することを提案した。

以上のような問題意識のもと、今回は、インターネット上の文章のうち、①新聞・雑誌記事、②「Yahoo!知恵袋」、③ブログ、④Twitterという4種類について、それぞれ検索を行い、俗語性が強いTwitterの蔑称が、俗語が掲載されることが少ないと思われる新聞・雑誌記事、中でも一般紙に掲載されるに至るまでの過程を素描してみることにした。本稿は、岡田(2013)で述べた、インターネット上の文書を、対象を限定して検索することで日本語研究に生かせるのではないかという可能性を模索する具体的な試みでもある。

3. Twitterの蔑称が新語収集の対象になっているか —『現代用語の基礎知識』(自由国民社)の確認結果

既に1.節で述べたように、本稿で扱う語は、Twitterの蔑称としての「バカッター」「バカ発見器」で

ある。次節以降、調査の詳細を報告するが、その前に、そのような蔑称の存在が、新語収集の対象となり、記録されてきたか否かを確認したい。

本節での確認においては、『現代用語の基礎知識』（自由国民新社）を利用する。『現代用語の基礎知識』は、自由国民社が「1948年の創刊以来、毎年最新の語・時事語・流行語から現代社会を理解するための基礎用語まで、第一線で活躍する専門著者がわかりやすく解説している」「日本で唯一の新語年鑑」である（<http://gendaiyogo.jp/about.html>）。そのような性格を持つ『現代用語の基礎知識』に「Twitter」という語、およびTwitterの蔑称が収載されているか、収載されているとすれば何年版からかを確認した。

その結果をまとめたものが、以下の表1である。表1からは「Twitter」が日本語と日本社会に受け入れられる過程、様相はもちろん、日本語研究にとっても興味深い事実（たとえば、表記の問題など）も読み取れる。しかし、本節で強調したいのは、以下の2点である。

まず、『現代用語の基礎知識』には、「Twitter」という単語自体が初めて収載されたのは、2008年版からであることが分かる。Twitterのサービス開始が2006年7月であるから、この程度のタイムラグは、出版物発行の事情に鑑みると、当然のことかもしれない。

また、『現代用語の基礎知識』の新しい版が出版されるたびに、「Twitter」という語の説明、記述内容は最新の状況を踏まえ、拡充されているものの、未だにTwitterの蔑称については言及がないという点を確認しておきたい。すなわち、現時点においては、Twitterの蔑称は新語収集の対象にはなっていないということである（この点については、本稿提出後、少し事情が変わった。詳細は本稿末尾の付記2を参照）。この事実が意味するところは慎重に検討しなければならない³⁾が、「Twitter」の蔑称が「日本で唯一の新語年鑑」である『現代用語の基礎知識』に言及されていないということは、少なくとも『現代用語の基礎知識』の最新版が発行された時点（2012年秋⁴⁾）においては、広く人口に膾炙していなかったと結論づけても

表1 『現代用語の基礎知識』における「Twitter」および関連用語の掲載状況

	「外来語・カタカナ語」の章（2009年版・2010年版） 「外来語」の章（2011年版～） ※いずれも、堀内克明氏、大森良子氏執筆 ※※巻末のコーナーで、数行程度の簡単な解説があるのみ	「インターネット」の章 ※大月宇美氏執筆	「メディアと社会」の章 ※水越伸氏執筆	その他の章
2008年版	○「ツイッター[twitter]」が立項。	○「Twitter（トゥイッター）」が立項。		
2009年版	○「ツイッター[twitter]」が立項。	○「Twitter（トゥイッター）」が立項。		
2010年版	○「ツイッター[Twitter]」が立項。	○「Twitter（ツイッター／ついったー）」が立項。	○「ツイッター[twitter]」が立項。	○「流行現象」の章（もり・ひろし氏執筆）にて「ツイッター[Twitter]」が立項。
2011年版	○「ツイッター[Twitter]」が立項。	○「Twitter（ツイッター）」が立項。	○「ツイッター[twitter]」が立項。 （・「この分野を読む」の欄の本文中にて「ツイッター」に言及。）	・「社会風俗」の章（神足裕司氏執筆）の「～なう」の項にて「Twitter（ツイッター）」に言及。 （・「現代音楽」の章（石田一志氏執筆）の「この分野を読む」の欄にて「ツイッター」「ツイッター・オペラ」に言及。）
2012年版	○「ツイッター[Twitter]」が立項。	○「Twitter（ツイッター）」が立項。	○「ツイッター[twitter]」が立項。	・「流行観測」の章（神足裕司氏執筆）の「ソーシャルメディア」の項にて「Twitter（ツイッター）」に言及。 （・「アラブの春 ジャスミン革命から中東世界を読む用語集」の章（立山良司氏、保坂修司氏執筆）の「この特集を読む」の欄にて「Twitter革命」に言及。）
2013年版		○「Twitter（ツイッター）」が立項。	○「ツイッター（Twitter）」が立項。	・「情報技術」の章（白鳥 敬氏執筆）の「短縮URL[URL Shortening]」の項にて「ツイッター（Twitter）」に言及。

※ ○印： 立項されている場合 ・印： 立項されておらず、別後の解説文中にて出現した場合

※※ 「」内は、立項されている場合は見出しの表記、本文中での言及の場合は出現した表記（アルファベット表記の頭文字の大文字小文字の違いもママ）。

いいのではないか。

そのような状況を踏まえた上で、次節以降をお読みいただければ幸いである。

4. 調査対象

本稿での調査対象は、既に述べたとおり、①新聞・雑誌記事、②「Yahoo! 知恵袋」、③ブログ、④Twitterの4種類である。

①の新聞・雑誌記事は、紙媒体で出版されている新聞・雑誌記事に相当すると思っていただいて構わない。本稿では、5. 1. 節で詳述する通り、インターネット上で利用できるデータベースを利用するが、それは、基本的には紙媒体で発行されたものをデータベース化したものだからである。②の「Yahoo! 知恵袋」とは、インターネット上で質問と回答のやりとりをするサイトのことである。③のブログとは、「日記感覚で日々更新していくような形式のホームページ」（大月宇美2013）のことである。④のTwitterとは、「インターネットを通じて140字以内の『つぶやき』を不特定多数にリアルタイムに発信し、自分で選択した他人の『つぶやき』を受信するサービス」（津田大介2009）⁵⁾のことである（その他、詳細は、本稿の註7や岡田2013もご参照いただきたい）。

以上のような性格の違いを踏まえた上で、本稿で調査対象とする4種類の文章を類型化すると、おおよそ、以下の表2のようになろう。なお、以下の表2は、おおよその傾向をまとめたもので、絶対的な類型ではない。たとえば、新聞・雑誌記事の書き手はプロ（文章を書くことを生業としている人々）が多いと思われるが、依頼原稿等や読者投稿欄などはプロ以外の人間が書くこともある。この点を予めご了解いただきたいうえで、以下、表2について、簡単な説明を加える事にする。

表2 今回の分析対象の言語資料性の違い

	A: 書き手	B: 校閲が入るか	C: 対話的か独話的か	D: 改まり度
①新聞・雑誌記事	プロ（記者）	入る	独話的	非常に高い
②Yahoo! 知恵袋	一般人	入らない	対話的	高い
③ブログ	一般人	入らない	独話的	様々
④Twitter	一般人	入らない	対話的／独話的	低い

まず、「A: 書き手」という観点である。上述の通り、新聞・雑誌記事の書き手は、文章を書くことを職業としている人々（記者やライター）である場合が多いと思われる。一方、「Yahoo! 知恵袋」、ブログ、Twitterの書き手は、多くの場合、文章を書くことを生業としていない人々であると考えられる。

次に、「B: 校閲が入るか」という観点である（この観点は、「A: 書き手」と連動する観点とも位置づけられるかも知れない）。新聞・雑誌記事の場合は、公開される前に、書き手以外の第三者によるチェック（校閲）が入ると考えられる。その一方で、「Yahoo! 知恵袋」、ブログ、Twitterの場合は、そのような作業は入らないと考えられる。

以上のA, B, 二つの観点を踏まえると、新聞・雑誌記事は、誤字脱字、不整表現、規範的な文法から逸脱した表現（いわゆる「ら抜き言葉」など）などは少ない、整った文章である可能性が高い。一方、「Yahoo! 知恵袋」、ブログ、Twitterは、誤字脱字や不整表現、規範的な文法からは逸脱した表現が含まれる可能性が、少なくとも新聞・雑誌よりは高いと考えられる⁶⁾。

「C: 対話的か独話的か」という観点は、以下のように考えられるだろう。新聞・雑誌記事、ブログは、相手からの反応を前提としないため、独話的な性格を持つといえる。一方、「Yahoo! 知恵袋」は、インターネット上で質問をし、また、その質問に回答するというスタイルをとる。すなわち、「Yahoo! 知恵袋」は、質問者は回答者からの回答を期待して文章を書き、回答者は質問者の質問に回答する形で文章を書く。そのような形式を踏まえると、質問者、回答者共に、文章を書く際、常に相手の存在が意識していると思われるため、「Yahoo! 知恵袋」は対話的な性格を持つと言えるようなのである。

「C: 対話的か独話的か」という観点からの分類が難しいのは、Twitterである。Twitterの実例を眺めると、フォロワー（自分のツイートをフォローしてくれている人）とやりとりをするという対話的な使

い方をしている人⁷⁾ もいれば、誰かからの反応を必ずしも期待しているとは思えず、延々と独り言的なものを書き込んでいる人もいる⁸⁾。Twitterがどちらの用途で使われているか、にわかには判断できなかったため、表2の「C: 対話的か独話的か」のTwitterの欄は、「対話的／独話的」とした次第である。

「D: 改まり度」という観点であるが、ここでは、文章を読んだ際に受ける印象を「改まった／くだけた」という尺度で表現する場合の評価、と定義したい。すなわち、表2でいう「改まり度が高い」とは改まった、硬い印象を受ける文章、逆に「改まり度が低い」とはくだけた、柔らかい印象をうける文章、ということになる。具体的には、新聞・雑誌記事の多くは漢語が多い、「だ・である」体が使用されているなどの要因から、改まり度が非常に高いという印象を受ける。また、「Yahoo! 知恵袋」は、質問する、あるいは質問に回答するという形式で、読み手の存在を想定して書かれていることが多いため、読み手に不快感を与えないための配慮があり（たとえば、「です・ます」体や敬語を使用する）、結果として、改まり度が高い印象を受ける。しかし、使用される語彙には日常会話で使用されるものも多いため、新聞・雑誌よりは改まり度が低い印象を受ける。その一方で、Twitterは、「体裁を整える作業なしで気軽に利用できる」（津田2009）という性格が反映しているのか、非常に日常会話に近い印象を受けるため、改まり度は低いと位置づけることが出来そうである。最後に、ブログの改まり度は、実に様々である。政治、経済、時事問題について論じたブログなどは新聞・雑誌記事に近く、改まり度が高い印象を受ける一方で、身辺雑記などは非常に改まり度が低い印象を受ける。そのような実態を踏まえると、ブログの改まり度は、一律に位置づけることが出来ないとするのが妥当だと考える⁹⁾。

なお、「D: 改まり度」に関する以上の記述は、あくまで筆者の個人的感覚に基づく議論であるが、筆者の個人的感覚が必ずしも外的外れではないことは、小磯花絵ほか（2009）の試みから、裏付けることができる。

小磯ほか（2009）は、小磯ほか（2009）発表時に「構築中の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）¹⁰⁾ と、2005年に一般公開された『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）¹¹⁾」に格納された七つの言語資料（「BCCWJから、(1)行政白書、(2)新聞¹²⁾、(3)小説、(4)WEB データ（電子掲示板サイト「Yahoo! 知恵袋」）、(5)国会会議録¹³⁾」を、CSJから、(6)学会講演、(7)模擬講演（主に個人的内容に関する一般人によるスピーチ）」小磯ほか2009）を対象に、先行研究において各種文章のジャンルの判別に有効と思われると指摘された六つの指標を利用し、分析対象とした七つの言語資料のタイプを推定するモデルを、ステップワイズ変数選択（変数増減法）で求めている。その結果、「専門性や改まり度の程度、あるいは書き言葉的／話し言葉的なもの」を分けるという基準においては、「白書、新聞、小説・WEB 掲示板・話し言葉」という順番に並んだという（白書の方が改まり度が高い）。

小磯ほか（2009）ではブログやTwitterは分析対象にされていないが、筆者の個人的感覚に基づく「D: 改まり度」の記述と、小磯ほか（2009）の統計的な改まり度の分析結果は、以上に見たように、おおそ一致している。したがって、表2で筆者が示した「D: 改まり度」という観点は、おおそ、的を射ていると考える。

以上、本節での議論をまとめるならば、本稿で分析対象とする文章は、種々の観点から、言語資料性を異にする、ということになる。本稿では、以降、その言語資料性が、Twitterの蔑称の表れ方の違いにも反映するのではないかという仮説のもと、各種資料においてTwitterの蔑称の現れ方を考察していく。

5. 調査方法

5. 1. 新聞・雑誌の場合

インターネット上で新聞・雑誌の記事検索をする方法はいくつかあるが、今回は、@niftyが提供しているサービス「新聞・雑誌記事横断検索」（<http://business.nifty.com/gsh/RXCN/>）¹⁴⁾を利用した。

このサービスは、「最大で1984年8月（朝日新聞記事情報）から、朝日、読売、毎日、産経の全国紙の他、地方紙、専門紙、経済誌等の過去記事を一括して検索できる」（上記URLのページ内の説明文より）サービスで、2013年10月現在では「146紙誌・5000万記事以上」が検索の対象となっているとのことである（<http://business.nifty.com/cs/bd-category/category/news1/1.htm>）。

このデータベースを使う理由は、上記に示したとおり、データの多様性（種々の新聞、雑誌の記事が収載されている）にある。実は従来の日本語研究でも新聞記事のデータベースを使用した研究は非常に多くあるが（この種の研究は非常に多く存在しているので、その一つ一つを紹介することは筆者の能力を超えるほどである）、そのほとんどは、ある特定の新聞社のデータベースを使用したものであった。しかし、本稿の調査対象語であるTwitterの蔑称のような新語、流行語を研究する場合には、特定の新聞社のデータベースを使用しただけでは不十分な事態に陥る可能性があることが、容易に予想できる。新聞社の方針や新聞の種類（一般紙かスポーツ紙かなどの違い）によって、新語、流行語の出現に差異があると思われるからである¹⁵⁾。

利用方法は、以下のとおりである（本サービスを利用したことのない方も多いと思われる上に、会員登録をしないと検索を実行することが出来ないため、やや詳しく、説明する）。

(4)①（今回の場合であれば、@niftyの）会員登録をする¹⁶⁾。

②上記URLを経由してログインする。

③ログイン後は図1のような画面が表示されるので、「キーワード」の欄に検索対象語を入力した後に、「検索」のボタンをクリックする。「キーワード」の欄の下に、二つ、選択肢が存在するが、ここは、「タイトルと本文に含まれる文字列を検索」を選択したほうが良いであろう（「タイトルに含まれる文字列を検索」を選択すると、見出ししか検索の対象とならないためである）。なお、この画面で、検索対象紙誌や検索対象期間を指定することも可能である。

図1 「新聞・雑誌記事横断検索」の検索語入力画面

④検索結果の画面が、次ページの図2である。「バカッター」で検索した場合、データベース全体で21件がヒットしたということがわかる（検索日時は2013年10月29日午後1時）。同時に、どの媒体に何件存在しているかということもわかる。ここまでは無料である。

⑤実際の用例を確認するためには、図2にある「一覧表示」のボタンをクリックする。すると、次ページの図3のような画面が表示され、検索語が含まれる記事の見出しを確認することができる。ただし、ここで注意をしなければならないことは、見出しを表示させると、見出し1本あたり、数十円の課金がされるということである（図2から図3へ移行する前に、課金される旨の「警告表示」が画面に現れる。134ページ図4を参照）。なお、掲載日が新しい順に表示させるか、古い順に表示させるかは、図2の時点で決定したほうがよい。なぜなら、図3の画面を出した後に表示させる記事の掲載日の並び方を変更しようとすると再検索の扱いとなり、改めて料金を支払うことになるからである。掲載日の順を変更するには、図2で「新しい記事」と表示されているプルダウンメニューを操作する。また、課金される見出しの表示の本数も、図2で「20件」と表示されているプルダウンメニューで選択可能である（1件から最大200件まで選択可能）。

⑥図3で表示された記事のうち、本文を確認したい場合は、確認したい記事の見出しをクリックす

新聞・雑誌

企業情報 新聞・雑誌 人

検索結果は21件です。

キーワード	バカッター
日付	全期間

新しい記事 から 20 件毎に表示する。

☒ ハイライト表示あり(本文)
☐ ハイライト表示なし

一覧表示

■ 表示媒体指定 [全て選択 | 全て解除]

<input type="checkbox"/> 共同通信[0件] <input type="checkbox"/> 読売新聞[0件] <input type="checkbox"/> 河北新報[0件] <input type="checkbox"/> 神戸新聞[0件] <input type="checkbox"/> 岩手日報[0件] <input checked="" type="checkbox"/> 茨城新聞[1件] <input type="checkbox"/> 北國・富山新聞[0件] <input checked="" type="checkbox"/> 静岡新聞[1件] <input type="checkbox"/> 徳島新聞[0件] <input type="checkbox"/> 佐賀新聞[0件] <input type="checkbox"/> 宮崎日日新聞[0件] <input type="checkbox"/> 公明新聞[0件]	<input type="checkbox"/> NHKニュース[0件] <input type="checkbox"/> 毎日新聞[0件] <input type="checkbox"/> 東京新聞[0件] <input type="checkbox"/> 中国新聞[0件] <input type="checkbox"/> 秋田魁新報[0件] <input type="checkbox"/> 下野新聞[0件] <input type="checkbox"/> 福井新聞[0件] <input type="checkbox"/> 伊豆新聞[0件] <input type="checkbox"/> 四国新聞[0件] <input type="checkbox"/> 長崎新聞[0件] <input type="checkbox"/> 南日本新聞[0件] <input type="checkbox"/> しんぶん赤旗[0件]	<input type="checkbox"/> テレビ番組放送データ[0件] <input checked="" type="checkbox"/> 産経新聞[4件] <input type="checkbox"/> 新潟日報[0件] <input type="checkbox"/> 西日本新聞[0件] <input type="checkbox"/> 山形新聞[0件] <input type="checkbox"/> 上毛新聞[0件] <input type="checkbox"/> 信濃毎日新聞[0件] <input type="checkbox"/> 京都新聞[0件] <input type="checkbox"/> 愛媛新聞[0件] <input type="checkbox"/> 熊本日日新聞[0件] <input type="checkbox"/> 琉球新報[0件] <input type="checkbox"/> 日刊スポーツ[0件]	<input checked="" type="checkbox"/> 朝日新聞[3件] <input checked="" type="checkbox"/> 北海道新聞[2件] <input type="checkbox"/> 中日新聞[0件] <input type="checkbox"/> 東奥日報[0件] <input type="checkbox"/> 福島民報[0件] <input type="checkbox"/> 北日本新聞[0件] <input type="checkbox"/> 岐阜新聞[0件] <input type="checkbox"/> 山陽新聞[0件] <input type="checkbox"/> 高知新聞[0件] <input type="checkbox"/> 大分合同新聞[0件] <input type="checkbox"/> 沖縄タイムス[0件] <input checked="" type="checkbox"/> スポーツニッポン[1件]
---	---	--	---

図2 「新聞・雑誌記事横断検索」の検索結果表示画面（件数）

新聞・雑誌

企業情報 新聞・雑誌

チェックボックスで複数記事を選択すると、一括表示が可能です。

❌ この記事は本文を表示できません。

見出しの右側に ボタンがある記事は、写真または図や表、PDFを表示できます。

検索結果一覧 総計 21 件中 1 ~ 10 件目を表示
[1](#) [2](#) [3](#) [次ページ](#)

- ☒ ネットが変える、現実の世界「バカッター」問題を読み解く社会学者、鈴木謙介
☒ 朝日新聞 2013.10.01 東京夕刊 3頁 文化芸能 写図有 (全1,437字)
☒ 【産経web】ライブアクセスランキング(14日~20日)
☒ 産経新聞 2013.09.22 大阪朝刊 20頁 第4社会 (全130字)
☒ 悪ふざけ写真「バカッター」の恐怖 「不適切投稿」続出し、店員のスマホ持ち込み禁止。手の打ちようがないのは客の「犯行」。
☒ F&Cタイム 2013.09.20 DEEP (全2,394字)
☒ 【精神科女医のつぶやき】片田珠美(54)自己愛ゆえのバカッター
☒ 産経新聞 2013.09.19 大阪夕刊 4頁 夕刊特集 (全954字)
☒ (私の視点)悪ふざけ投稿 制裁一刀倒し 安易すぎる 山本聡
☒ 朝日新聞 2013.09.05 東京朝刊 15頁 オピニオン1 写図有 (全1,043字)
☒ (ネットろんだん)「バカッター」の夏 個人に託された「公器」の危うさ
☒ 産経新聞 2013.08.30 東京朝刊 6頁 オピニオン 写有 (全1,554字)
☒ (ネットろんだん)「バカッター」の夏 個人に託された「公器」の危うさ
☒ 産経新聞 2013.08.30 大阪朝刊 14頁 オピニオン 写有 (全1,554字)
☒ 記者コラム つまみ知る先はどこに
☒ 茨城新聞 2013.01.25 朝刊 19頁 地域 (全491字)
☒ 屋内外FTTH光配線など出展/建設通信展に住友電工
☒ 建設通信新聞 2012.05.25 建設通信新聞 (全296字)
☒ [スポニチ・フレッシュ日報]つり 23日・中朝(その1)
☒ スポーツニッポン 2009.10.24 スポーツニッポン 25頁 (全2,176字)

図3 「新聞・雑誌記事横断検索」の検索結果表示画面（見出し）

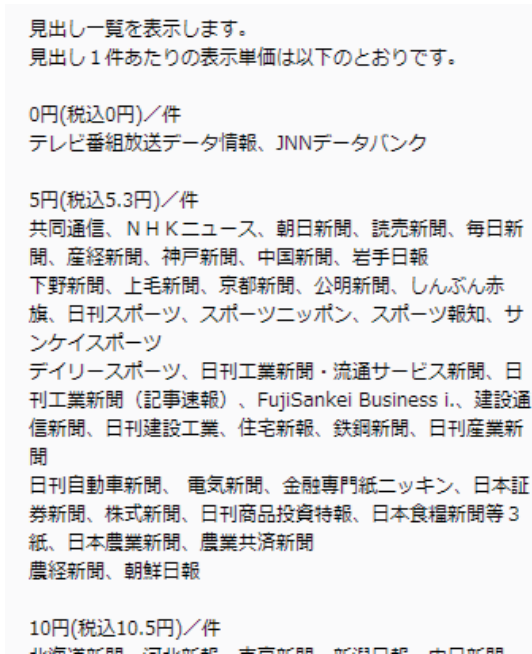


図4 図2から図3に移る前に表示される課金警告

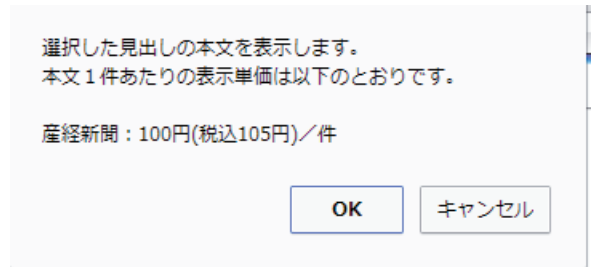


図5 図3から記事本文を表示させる前に表示される課金警告

る。ここで注意をしなければならないことは、記事本文を表示させると、記事1本あたり、100円程度の課金がされるということである（記事を表示させる前に、課金される旨の「警告表示」が画面に現れる。図5参照）。

以上のような手続きを踏んで、新聞・雑誌記事におけるTwitterの蔑称の初出を探った。

なお、参考までに、このサービスの長所と短所を記しておく（特に(6)に示した短所の①，②，③は、データベースを使用した言語研究を行う上で、特に言語資料の性格という観点から、真剣に考えなければならない、大きな課題である）。

(5)長所：①インターネットに繋げる環境があればどこでも検索可能ある。

②非常に多様な媒体（一般紙の全国紙と地方紙，専門紙，スポーツ新聞，雑誌など）の記事を検索することが可能である。

③検索結果件数を確認するだけなら無料である（言語研究には、毎日新聞，朝日新聞，読売新聞の記事のデータベースが利用されることが多いが，1年分のデータを購入するのに10万円以上の金銭的負担が発生する。詳細は<http://www.nichigai.co.jp/sales/corpus.html>を参照のこと）。

(6)短所：①紙媒体で発行された記事のうち全てがデータベース化されているか、不明である¹⁷⁾。

②紙媒体で発行された記事とデータベース化された記事との間に、文字や表現の差異が存在している可能性がある¹⁸⁾。

③単純な文字列検索しか出来ず言語研究に利用するには不便な点も多い¹⁹⁾。

④当該サービスを利用するには、どこかの会社に会員登録しなければならない。

⑤1984年8月以前の記事は検索できない（しかも、すべての媒体が1984年8月から検索できるわけではない²⁰⁾）。

⑥実際に用例を確認しようと思うと、それ相応の経済的負担が発生する（見出し1本を確認するのに数十円，記事本文を確認するのに1本100円強の負担は、予想外に重い）。

5. 2. 「Yahoo! 知恵袋」の場合

「Yahoo! 知恵袋」の場合は、まず、トップページ (<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>) のキーワード入力窓に、今回の調査対象となるTwitterの蔑称を入力し、検索を実行した。そして、検索結果表示画面で選択できる「表示順序」を、デフォルトの「関連度順」から「更新日時の古い順」に変更した。そうすることにより「Yahoo! 知恵袋」における「バカッター」の初出を探ることが可能になる。

なお、インターネット検索エンジンには「時間的安全性」と「論理的整合性」²¹⁾に問題がある場合もあり、必ずしも言語研究に使用するには適していないということが指摘されている。ただ、「Yahoo! 知恵袋」の検索機能については、「時間的安全性」と「論理的整合性」の問題が生じるか否かについては未検証であることを付記しておく。

5. 3. ブログの場合

ブログ検索エンジンはいくつか存在する²²⁾が、今回は、「Google ブログ検索」(<http://search.yahoo.co.jp/blog?>)を利用した。「Google ブログ検索」を使用するのは、任意の期間を指定して検索をすることが可能だからである²³⁾。ただし、「Google ブログ検索」には検索結果を日付順にソートする機能がない。そこで、「Google ブログ検索」の検索結果表示画面の「検索ツール」において(図6)、「期間指定なし」から任意の期間を設定し、また、「関連度順」を「日付順」とし(図7)、Twitterの蔑称の初出を探った。



図6 Google ブログ検索の「検索ツール」

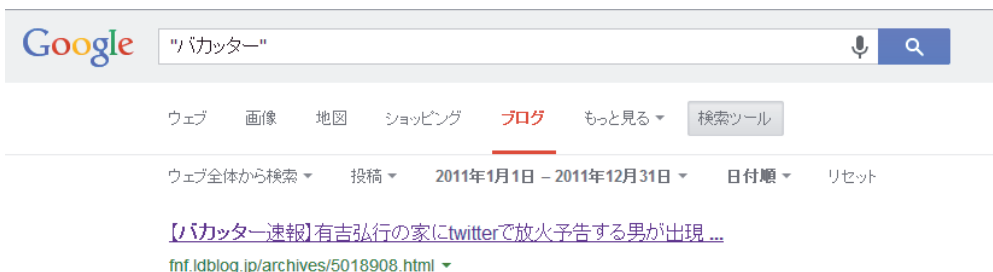


図7 Google ブログ検索の「検索ツール」において本稿で述べた検索条件を指定した場合

なお、「Google ブログ検索」での検索では、「フレーズ検索」(検索語を「 ” 」で囲むこと。詳細は岡島2011などを参照)を行った。フレーズ検索を行わなければ、「バカッター」という語を検索したにもかかわらず、「Twitter」という語まで検索対象に含まれてしまうからである。

また、ブログの場合には、岡島昭浩(2011)が指摘するように、「日付を換えて記事を作ったり、後日文言を修正したりすること」ができるので、データの扱いには慎重になる必要があること、さらには、5. 2. 節で触れた「時間的安全性」と「論理的整合性」の問題が、「Google ブログ検索」に生じるか否かについては未検証であること²⁴⁾、を付記しておく。

5. 4. Twitterの場合

Twitterの検索には、岡田（2013）で詳しく紹介したツイート検索エンジンTOPSY（<http://topsy.com/>）を利用した。TOPSYの使い方の詳細は岡田（2013）をご参照いただきたいのだが、岡田（2013）提出後、TOPSYの仕様が変更されたようである（2013年9月13日確認）。岡田（2013）以降になされた、TOPSYの大きな変更点は、以下の4点である。

- (7)①検索結果の画面で「過去すべて」を選択、もしくは日付を指定して検索した場合、検索実行後、検索結果件数が表示されなくなった。
- ②検索結果の具体例が、100件までしか表示されなくなった。
- ③ツイートされた日時を指定して検索する際には、岡田（2013）の6. 2. 節で説明した方法が使えなくなった（条件指定の画面で、検索期間の設定をすることが不可能になった）。新仕様でツイートされた日時を指定して検索する場合には、一度、検索結果の画面を表示させた後、その画面上で行うことになる。
- ④各ツイートについて、ツイートされた日時を基準にソートできるようになった。すなわち、検索語を含むもっとも古いツイートと、もっとも新しいツイートを簡単に表示させることが可能になった。

(7)の①、②の変更点は、TOPSYを利用して、Twitterを言語データとした日本語研究を行う際にとっては、「改悪」である。特に、①の変更点のうち、「過去すべて」の検索結果件数が表示されないという点は、Twitter全体を検索対象とした（Twitter全体を一つの言語資料の総体と見なした）日本語研究を行う際にはマイナスと言わざるを得ない。また、日付を指定した検索を行った際に検索結果件数が表示されないという点は、岡田（2013）で試みた分析を行うことができなくなり、TOPSYを活用し、Twitterを言語資料とした言語変化研究、通時的な研究を行う際の大きな損失である。また、②の変更点も、実際に看取できる用例数の上限が100件まで限定されてしまったことを意味し、これも、TOPSYを活用し、Twitterを言語資料とした言語研究を行う際のマイナス点になる。

一方、④の変更点は、本稿でも活用する機能であり、ある新語、流行語のTwitterでの初出を探る際にプラスとなりそうである。

いずれにしても、この種のサービスは突然、仕様変更されるという問題点にも留意しなければならないと痛感した次第である²⁵⁾。

本稿では、新仕様で追加されたTOPSYの機能（上記(7)の④）を利用した。すなわち、検索画面でTwitterの蔑称を指定し検索を行い、その後、ヒットした検索語が含まれるツイートを、ツイートされた日が古い順に並び替え、TwitterにおけるTwitterの蔑称の初出を探った。検索の際のその他の設定については、岡田（2013）で「推奨した」条件とした（検索対象は「ツイート」、検索対象言語は「すべて」に、それぞれ指定した）。

なお、TOPSYについて、5. 2. 節で触れた「時間的安定性」と「論理的整合性」の問題が生じるか否かについては未検証であることを付記しておく。

6. 調査1： 「バカッター」の場合

6. 1. 新聞・雑誌記事における「バカッター」

新聞・雑誌記事における「バカッター」の初出は、以下の(8)の記事であった。

- (8)見出し： 「記者コラム つながる先はどこに」

（前略）短文投稿サイト「ツイッター」や交流サイト「フェイスブック（FB）」が隆盛だ。ツイッターは未成年が飲酒や法律違反をつぶやいて“炎上”することから「バカッター」と呼ばれている一方、FBは友達登録が多いと就職活動に有利ともいわれている。「何とかとはさみは…」ではないが道具は道具、使う人次第なんだけどなあと、ふと思った。

（2013年1月25日茨城新聞朝刊）

そして、2番めに古い用例が1. 節の(1)で紹介した産経新聞の記事（2013年8月31日）であり、3番目に

古い用例が以下の(9)の記事である。

(9)見出し： (私の視点) 悪ふざけ投稿 制裁一辺倒, 安易すぎる 山本聡

(前略) 現代の若者の軽薄さをあげつらい、昔は近隣の叱責(しっせき)もあったと懐古する声もある。数年前からツイッターは「バカッター」などと称され、自慢げにSNS²⁶⁾にアップする若者の愚行がはやった。その時も、その若者が就職の内定を取り消されたり、大学の処分を受けたりした。(後略)

(2013年9月5日朝日新聞朝刊・記者の署名あり)

(9)以降に新聞・雑誌記事において「バカッター」が観察されたのは4例である。用例数が少ないため、以下、全てを紹介したい。

(10)見出し： 【精神科女医のつぶやき】片田珠美 (54) 自己愛ゆえのバカッター

バカッター騒動が後を絶たない。コンビニの冷蔵庫の中に入ったりパトカーの屋根に乗ったりして撮影した写真をインターネット上の交流サイトに投稿する、あれである。(中略)

もっとも私だって、この連載のおかげで自己顕示欲も承認欲求も満たすことができているけど、もしなくなったら、バカッターに走るかもね。

(2013年9月19日産経新聞大阪版夕刊・執筆者の署名あり)

(11)見出し： 悪ふざけ写真「バカッター」の恐怖 「不適切投稿」続出に、店員のスマホ持ち込み禁止。手の打ちようがないのは客の「犯行」。

「不適切投稿」という呼び名すら立派すぎる。ネット上の通称「バカッター」で十分だ。飲食店やコンビニエンスストアなどで、店員たちが食材や厨房などで悪ふざけしている写真をツイッターなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)に投稿する騒ぎが多発している。(中略)

店員のバカッターは徐々に減りつつあるようだ。

しかし、客にバカッターをされると、もはや打つ手がない。(後略)

(2013年9月20日雑誌『FACTA』²⁷⁾・記者の署名なし)

(12)見出し： 【産経west】ライフアクセスランキング(14日～20日)

(前略) (2) 【精神科女医のつぶやき】片田珠美 (54) 自己愛ゆえのバカッター騒動 (19日) (後略)

(2013年9月22日産経新聞大阪版朝刊)

(13)見出し： ネットが変える、現実の世界 「バカッター」問題を読み解く社会学者、鈴木謙介

(前略) ほとんどが若い世代のこうした振る舞いが相次いで話題になったことで、ネット上では、「バカッター」という言葉が生まれた。ツイッターは、善悪の区別も、公共心もない人間を見つけ出すことができる——。つまり、「バカ発見器」²⁸⁾ だという意味だ。(後略)

(2013年10月1日朝日新聞朝刊・記者の署名あり)

以上紹介した用例から、新聞・雑誌における「バカッター」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

(14)①2013年に入って「バカッター」という語が散見されるようになった。特に、新聞・雑誌記事での「バカッター」の用例全7例中6例は、2013年8月以降の記事であることは注目に値する。これは、2013年夏ごろからしきりにTwitter上での不適切なツイート報道がなされるようになったことと無縁ではないであろう。

②多くの場合は、Twitterの蔑称の「使用例」ではなく「言及例」である。使用例と考えられる用例は、「軽め」のエッセイ(10)か雑誌(11)であることには注目したい。

③多くの場合、ニュース報道の記事ではなくコラムや記者の意見を表明する文章内で使用されている。また、そのような性質上、署名記事で使われることが多い。無署名の記事での使用は、(11)のみである²⁹⁾ (なお、(12)は(10)の記事がインターネット上で多くアクセスされたことを報じる記事であり、その他の用例と性質を異にしている)。

なお、(14)の②で「使用例」と「言及例」という術語を用いた。これらの術語は、8. 節で行うまとめにおいても、非常に重要になる概念であるが、ここでは、田野村(2000)の議論を引用することで、その説明に

替えたい。

- (15) 哲学や言語学において言語表現の「使用(use)」と「言及(mention)」の区別が言われることがあるが、得られた文書に含まれる、「用例」が後者の例である場合がある。例えば、「おとつい」を含む文書の中には、“当地の方言では「おととい」のことを「おとつい」と言う”といったことを述べたものが少なくない。“「そうゆう」という言い方を見ると私は気分が悪くなる”という発言を「そうゆう」の使用例と見なすことには無理がある。一般には言語表現がこのようにただ言及される機会は一層にはそれほど多くないとしても、我々がことばとしての関心を抱くような表現においては言及の「用例」の比率が高まることに注意すべきであろう。

本節の最後に、補足しておく。4. 1. 節で言及したとおり、本稿の調査で使用した新聞・雑誌記事横断検索サービスでは、「バカッター」という語は、21件ヒットした。しかし、(8)以前の記事は、すべて、Twitterのことを指す「バカッター」ではなく、他の語にたまたま「バカッター」という文字列が含まれている例⁽³⁰⁾であった。

6. 2. 「Yahoo! 知恵袋」における「バカッター」

「Yahoo! 知恵袋」において「バカッター」が使用された用例のうち、古い順から三つを、以下に列記する。

- (16) (前略) ツイッターで飲酒運転の自慢したりバカッターで喫煙の自慢したりするクソッター民がいっぱいいるのって (後略)

(投稿日時は2012年2月18日 13時47分01秒)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1081738160

- (17) (前略) しかももう一人の子の整形も暴露してましたし、ツイッターの事をバカッターって言われるわけだよな…って思いました。 (後略)

(投稿日時は2012年6月19日18時53分08秒。2012年6月19日20時31分51秒に編集)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1389366688

- (18) (前略) バカッターで未成年が飲酒自慢やカンニング自慢するのと同じ心理www (後略)

(投稿日時は2012年6月24日 13時34分08秒)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1089652020

以上紹介した用例から、「Yahoo! 知恵袋」における「バカッター」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

- (19) ①2012年6月頃から「バカッター」という語が散見されるようになった。

- ②「バカッター」という語が使われるようになった当初から、使用例が認められる (16), (18)。一方, (17)は言及例である)。

6. 3. ブログにおける「バカッター」

ブログにおいて「バカッター」が使用された用例のうち、古い順から五つを、以下に列記する (20, (21)の伏せ字部分は、個人名、大学名である)。

- (20) ●●大学の××××君がなでしこ△△との合コンをバカッターで実況し暴露! △△は朝ズバさぼる (投稿日は2011年7月21日)

<http://ninnnnsoku.doorblog.jp/archives/3939322.html>

- (21) ●大の××××がなでしこ△△との合コンをバカッターで暴露

(投稿日は2011年7月21日)

<http://d.hatenane.jp/jmwjow38/20110721/1311271442>

- (22) 【バカッター】PSPの液晶故障で修理センターに送ったが無償保証じゃないのかよw

(投稿日時は2011年8月10日14時54分)

<http://blog.livedoor.jp/sin2ch/archives/52385714.html>

⑳【バカッター】 自称おもちゃ屋店員 15日解禁のゲームタイトル情報をリーク

(投稿日時は2011年10月5日4時33分)

<http://afternoongame.blog12.fc2.com/blog-entry-2787.html>

㉑ジョブズを偲ぶつぶやきをした孫正義に、バカッター民が完全な言いがかりを次々と浴びせる

(投稿日は2011年10月19日)

<http://sierblog.com/archives/1551830.html>

さて、㉑, ㉒, ㉓, ㉔の用例は、すべてインターネット掲示板「2ちゃんねる」³¹⁾のまとめサイト³²⁾での用例で、「2ちゃんねる」のスレッド³³⁾名をコピーアンドペーストしたものである。したがって、ブログの書き手が使用したものではない。また、㉑は当該投稿日の記事のタイトルであるが、ブログ本文中で㉑で紹介されている「2ちゃんねる」のスレッドに言及しており、厳密な意味での使用例とは言い難いという点に留意したい。

このように見ると、ブログでは、2011年夏頃から「バカッター」という用例が散見され出すものの、この時期においては、厳密にはブログ内での使用例と見なせるものは少ない。

厳密な意味でブログ内での「バカッター」の使用例の登場は、以下の㉕まで待たなければならない(㉕以前にも、Google ブログ検索で「バカッター」がヒットするが、実際は、すべて、「2ちゃんねる」のまとめサイトでの用例である。なお、㉕の伏せ字はTwitterのID)。

㉕*****がなんだか話題になっていたまとめ、バカッター？

(投稿日は2012年5月21日)

http://bibibi.info/w/*****がなんだか話題になっていたまとめ、バカッター？

㉖以降、ブログ(「2ちゃんねる」のまとめサイト以外)でも、「バカッター」の用例が散見され始める。以下、数例、紹介する(㉗の伏せ字は市名)。

㉖バカッター晒し

twitterはじめようかなー なんてちょっと前の記事に
してましたが、某巨大板などでよく使われる言葉に
「バカッター」という言葉があります
簡単に理解できるようにtwitter上で色々やらかして
しまっている輩を指す言葉なんです
まあ バカッターなんて探せばボロボロ居ます(中略)
事の起りはバカッターのつぶやきから(中略)
まあバカッター炎上なんて
さしてめずらしい話じゃないのですが(後略)

(投稿日時は2012年5月23日8時59分)

<http://eyecanbe.blog10.fc2.com/blog-entry-722.html>

㉗バカッター ●●市議「放射能入りの血液欲しい？」

(投稿日時は2012年5月25日23時34分)

http://blog.livedoor.jp/poison_labo/archives/2425946.html

㉘バカ発見器³⁴⁾, バカッター

バカ発見器とは、ネットで使われる若者言葉です。

使用例

つぶやき「無免許運転なう」

ツイッターはバカ発見器だな。

(投稿日は2012年6月4日)

<http://boresound.blog133.fc2.com/blog-entry-240.html>

㉙【SNS】 ネット中毒・依存症にご用心 【バカッター】

(投稿日は2012年6月12日)

<http://minkara.carview.co.jp/userid/507066/blog/26785681/>

以上の用例を見ると、2012年5月下旬以降、ブログでも「バカッター」の使用例が散見される。もっとも、②8は「若者言葉辞典～あなたはわかりますか?～」というサイトでの用例で、言及例と見なすべきものであるし、②6は言及例と使用例が「同居」している。また、②5、②7、②9も、2012年5月下旬以降において、既に「バカッター」が定着しつつあったと思われる「2ちゃんねる」での書き込み³⁵⁾に対する感想を述べたものであり、ブログにおける「バカッター」の使用例と見なすには慎重になるべきかもしれないが、それでも、「2ちゃんねる」からのコピーアンドペーストではないという点で、②0から②4までの用例とは一線を画すといえる。

以上紹介した用例から、ブログにおける「バカッター」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

- ③0①2011年の夏ごろから「バカッター」という語が散見されるようになった。しかし、それらの用例は、「2ちゃんねる」からのコピーアンドペーストであり、ブログの管理者がブログに書き込んだ文章中での使用例は多くはない。
- ②ブログの管理者がブログに書き込んだ文章中での使用例は、2012年5月下旬ごろから増え始める。
- ③「バカッター」という語が使われるようになった当初から、言及例と同時に使用例も認められる。
- (④「バカッター」という語は、ブログに先行して「2ちゃんねる」で使用されていた。)

6. 4. Twitterにおける「バカッター」

Twitterにおいて「バカッター」が使用された用例のうち、古い順から三つを、以下に列記する。

- ③1**バカッター**で自分のIDいれたらひどいことになったのでそっと窓を閉じました

(ツイートされた日時は2010年2月20日 21時42分)

<https://twitter.com/ricocos/status/9383423939>

- ③2心中お察します・・・ >**バカッター**

(ツイートされた日時は2010年2月20日 21時48分)

<https://twitter.com/oinosawa/status/9383596345>

- ③3**バカッター**やってみたら、ひどい結果がでたので書けない

(ツイートされた日時は2010年2月20日 21時58分)

<https://twitter.com/basscan/status/9383909988>

岡島(2011)には、Twitterは「細切れの発言の前後の文脈がたどりにくく、用語の意味を考察しようとする際に不便である」という指摘がある。実際、上記の3例も、前後の文脈がなく意味が解釈しにくのであるが、「バカッターで自分のIDいれたら」「バカッターやってみたら、ひどい結果がでた」というツイートから判断するに、ここでの「バカッター」はTwitterの蔑称としての「バカッター」ではなく、ゲームのようなものであることが想像できる。また、2010年2月20日21時42分以降、急に(数分おきに)「バカッター」の用例が観察されるようになったのも不審といえば不審である。

そこで、さらに、2010年2月20日において「バカッター」を含むツイートを更に詳細に検討したところ、TwitterのIDを入力して「あなたがどんな馬鹿が占います」という「バカッター」と称する「ゲーム」が存在することが判明した(<http://king-soukutu.com/twit/?n=bakabaka>)。おそらく、上記の3例も、この「ゲーム」のことを指していると思われ、Twitterの蔑称としての「バカッター」の初出とは見なせないだろう³⁶⁾。

そこで、日付を新しい方へ戻って用例を検索したところ、確実にTwitterの蔑称としての「バカッター」の初出であると言えそうな例は、以下のとおりであった。

- ③3情弱**バカッター**民www³⁷⁾ RT @×××××: ハム速経由で知人の近況を知る RY @●●●●●: まあちゃんだ <http://hamusoku.com/archives/4524599.html> …

(ツイートされた日時は2011年4月19日 2時55分)

<https://twitter.com/ichinoseyuta/status/60038853699960833>

③4「情弱バカッター民」ってなんだか素敵！

(ツイートされた日時は2011年4月19日 23時24分)

<https://twitter.com/reitouorange/status/60348066976374784>

③5私も「バカッター」の一人、か・・・(´ι_`) RT@ (後略)

(ツイートされた日時は2011年5月6日 11時00分)

<https://twitter.com/chirokumi/status/66321328424230912>

③6 (前略) ブログとかバカッターがソースとか気が狂っとる。

(ツイートされた日時は2011年5月6日 12時50分)

https://twitter.com/God_Johann/status/66349019340865536

なお、③4に記載されているURLは「2ちゃんねる」の書き込みをまとめたもので、リンク先を参照すると「また情弱バカッター民が恥さらしてんのか」(2011年4月19日0時41分44秒の投稿)に行き当たる。つまり、このことから、「バカッター」は、Twitterで使用されるよりも前に、「2ちゃんねる」で使用されていたと推測される。同時に、Twitter上でのTwitterの蔑称である「バカッター」の「初出」となる③3のツイートは、実は、「2ちゃんねる」での表現を喩っている言及例と解釈するべきであろう。

以上紹介した用例から、Twitterにおける「バカッター」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

③8①2010年2月から「バカッター」という語が散見されるようになった。しかし、Twitterの蔑称としての「バカッター」ではない(ゲームのようなものの名称と思われる)。

②Twitter上でTwitterの蔑称としての「バカッター」の用例は、2011年4月ごろから増え始める。

③多くの場合、言及例(③3, ③4, ③5)であるが、使用例(③6)も確認できる。

④「バカッター」という語は、Twitterに先行して「2ちゃんねる」で使用されていた。

7. 調査2: 「バカ発見器」の場合

本節での考察では、「バカ発見器」「馬鹿発見器」という表記の違いは考慮に入れず、両者を一括して取り扱うことにする。

7. 1. 新聞・雑誌記事における「バカ発見器」

新聞・雑誌記事における「バカ発見器」が使用された用例を、検索時点(2013年10月29日)でヒットした全用例7例を、以下に紹介する。

③9見出し: (DIGI話) 選挙でネット禁止な訳 【名古屋】

(前略) それに、たとえばツイッターは、不思議と使い手の本性をあらわにするので「バカ発見器」と皮肉られることがあるくらい。下手に言えば炎上、カネを積んでもどうにもならず、候補者の実力を真に発揮しやすいのでは。(後略)

(2012年11月25日朝日新聞朝刊名古屋版・記者の署名あり)

④0見出し: 【ネットろんだん】 暴言ツイート 「官僚の憂鬱」皮肉な形で露見

(前略) ツイッターは気軽につぶやきを共有できる人気サービスだが、ホテル従業員が芸能人の宿泊を明かして処分されたり、「放射能汚染地域に住む人の血って、ほしいですか?」と献血を揶揄(やゆ)した群馬県桐生市議が議会から除名されるなど、官民間わず“舌禍”事件も後を絶たない。愚か者が正体を現すという意味で、「バカ発見器」の異名すらある。(後略)

(2013年6月21日産経新聞朝刊・記者の署名なし)

④1見出し: 編集部から

ブログやツイッターは「バカ発見器」なのだそうです。最近だと、病院窓口で番号で呼ばれたことに立腹し、診療代を払わなかった岩手県議がいました。

(2013年6月29日『週刊東洋経済』第6468号34頁・記者の署名なし)

④2見出し: また若者おバカ投稿…冷蔵庫に! パンの上に!

(前略) 相次ぐ飲食店従業員の衛生を無視した行為をネットで誇示するような行動に、ネットでは「炎上するのを分かっているのわざとやっているのか」「ツイッターはバカ発見器」など、あきれた声が多数を占めていた。(後略)

(2013年8月4日日刊スポーツ・記者の署名なし)

(43)見出し: 【論説】可視化されるネット 小学校から情報教育を

(前略) ツイッターをはじめとしたソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)は、誰もが手軽に情報を発信できる便利さをもたらした。ネット初心者でも簡単に扱える仕様は、革命的でさえあった。

半面、あまりに急速に広まったため、ネットを利用して得た情報が正しいかどうかを判断したり、ネット絡みのトラブルに巻き込まれたりしないための自衛といった能力(リテラシー)を備える間もなかったといえる。リテラシーが欠如したビギナーによるトラブルは後を絶たず、ネットの世界でツイッターは「バカ発見器」とまで呼ばれてしまっている。(後略)

(2013年8月18日佐賀新聞・記者の署名あり)

(44)見出し: 響き/「若気の至り」の代償

今年の夏が特に暑かったからではないだろうが、短文投稿サイト「ツイッター」などで若者の“奇行”を捉えた写真が次々と発見され騒動になった。客やアルバイトがコンビニやスーパーの冷凍ケースに寝転がる、線路の上で記念撮影…。毎日のように問題写真が発掘され、ツイッターは「バカ発見器」とまで言われる始末。(後略)

(2013年9月12日宮崎日日新聞・記者の署名なし)

なお、新聞・雑誌記事では「馬鹿発見器」という表記は見当たらなかった。また、1. で紹介した(1)の記事を掲載日順で(39)から(44)の中に位置づけるならば、(43)と(44)の間に入ることになる。一方、6. 1. 節で紹介した(13)は、新聞・雑誌記事において「バカ発見器」が使われた最新の例である。

以上紹介した用例から、新聞・雑誌記事における「バカ発見器」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

- (45)①「バカ発見器」という語は、2012年に1例の用例が認められるが(39)、散見されるようになったのは2013年6月以降のことである。
- ②全用例、言及例である(42)は使用例の引用で、言及例に相当すると言えよう)。
- ③多くの場合、ニュース報道の記事ではなくコラムや記者の意見を表明する文章、ニュース解説の内で使用されている。ニュース報道の記事での用例は、(42)のみである。なお、無署名記事でも使われることも散見される点は、(14)でまとめた「バカッター」の場合とは異なる傾向である。

7. 2. 「Yahoo! 知恵袋」における「バカ発見器」

「Yahoo! 知恵袋」において「バカ発見器」が使用された用例のうち、もっとも古いものは以下の(46)である。しかし、(46)は読んで分かる通り、(おそらくは)Twitterの蔑称としての「バカ発見器」の用例ではない。

(46)あなたにとって,,,,,

あったら怖いものって何ですか?

ちなみに私は,,,,,

バカ発見器です。

・・・オモツイタマドゾ

(投稿日時は2010年1月27日 23時54分06秒)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1135907961

確実にTwitterの蔑称としての「バカ発見器」の用例だと言えるものは、2011年に入ってから散見されるようになる。以下、確実にTwitterの蔑称としての「バカ発見器」の用例を、古い順から三つを、以下に列記する。

(47) (前略) ツイッターが原因で内定取り消された人や解雇された人や逮捕された人がいますね

馬鹿発見器にして、後悔先に立たずツール（後略）

（投稿日時は2011年6月4日18時45分40秒）

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1463770359

(48) (前略) バカ発見器でつぶやかれない様に注意してくれ。

（投稿日時は2011年7月5日23時38分38秒）

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1465969349

(49) (前略) ツイッターはバカ発見器とはよくいったものですね（・・ω・・）

（投稿日時は2011年7月11日16時30分35秒）

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1266372382

以上紹介した用例から、「Yahoo! 知恵袋」における「バカ発見器」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

(50) ①2011年6月頃から「バカ発見器」という語が散見されるようになった。

②「バカ発見器」という語が使われるようになった当初から、使用例が認められる（(47), (48)。一方, (49)は言及例である）。

7. 3. ブログにおける「バカ発見器」

ブログにおいて「バカ発見器」が使用された用例のうち、古い順から三つを、以下に列記する。なお、(51)以前にも、「バカ発見器」という用例がブログから1例看取できた（http://www.dice.co.jp/news/2010/11/第29回_バカ発見器）のだが、明らかにTwitterの蔑称ではないと判断できたため、今回の用例採集の対象からは除外した。

(51) ツイッター＝バカ発見器 或いは音楽評論家批判（後略）

（投稿日時は2010年10月9日11時27分）

<http://starynight426.blog42.fc2.com/blog-entry-379.html>

(52) twitterのことを、バカ発見器と言う

らしいですね、ネット上の一部では。（後略）

（投稿日時は2011年2月21日20時9分）

<http://blog.livedoor.jp/manbaken26/archives/1617157.html>

(53) ツイッターは「バカ発見器」（中略）

ネットの一部ではツイッターは「バカ発見器」と言われているようです。（中略）あまりものを考えないというか、「これやっちゃうとこうなるかも」という想定・配慮が足りてない（つまり、「頭が悪い」のだと言われても仕方ない＝「バカ発見器」）。印象としては、流行に乗っかってmixiに飛び付いたような人々がツイッターに流れているような気がしているのですが……。 （後略）

（投稿日時は2011年3月12日21時52分38秒）

<http://gamerseden.blog10.fc2.com/blog-entry-683.html>

(54) Twitterは馬鹿発見器（後略）

（投稿日時は2011年3月24日2時36分）

<http://anond.hatelabo.jp/20110324023648>

(55) ツイッターはバカ発見器ですね……。 （後略）

（投稿日時は2011年4月7日6時47分50秒）

<http://ameblo.jp/hakua927/entry-10853991850.html>

以上紹介した用例から、ブログにおける「バカ発見器」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

(56) ①2010年10月に「バカ発見器」という語の使用が認められる。ただし、言及例的な用例である(51)。

②安定的に「バカ発見器」の用例が観察されるようになったのは、2011年2月以降である。この時期には、言及例（(52), (53)）も使用例（(54), (55)）も観察される。

なお、6. 3. 節の(28)の用例は、(56)の指摘を踏まえると、ブログで「バカ発見器」で使われるようになってから、相当の時間を経ての記述であることを付記しておく。また、6. 3. 節で見たとおり、「バカッター」の場合には「2ちゃんねる」のまとめサイトでの用例が多数ヒットしたが、「バカ発見器」の場合は（少なくとも初出時期においては）「2ちゃんねる」のまとめサイトでの用例はヒットしなかった。

7. 4. Twitterにおける「バカ発見器」

Twitterにおいて「バカ発見器」が使用された用例のうち、古い順から五つを、以下に列記する（(59)の伏字はTwitterのID名）。

(57)twitterはユーザーの私生活が垂れ流されるがために、地頭馬鹿発見器としてかなり優秀に機能する。近い将来、企業の人事担当者が採用の際に利用するのだろうか、そんなこと知るか！（後略）

（投稿日時は2009年8月13日2時20分）

<https://twitter.com/doppelkun/status/3268893262>

(58)twitterはバカ発見器とな。言い得て妙ですな。

<http://kashino.tumblr.com/post/321592780/11-pdf-368k>

（投稿日時は2010年1月8日1月12日）

<https://twitter.com/tomomo917k2/status/7485149788>

(59)（前略）RT @×××××××××× 馬鹿発見器としてのついったー。素敵。（後略）

（投稿日時は2010年3月13日21時39分）

<https://twitter.com/cetacea/status/10422023658>

(60)（前略）ツイッターは実に優れたバカ発見器。（後略）

（投稿日時は2010年5月4日20時30分）

https://twitter.com/hatebu_comment/status/13359851888

(61)twitterは馬鹿発見器 これはホント当たってると思う

（投稿日時は2010年6月27日21時58分）

<https://twitter.com/r0ckies/status/17162335727>

実は上記に上げた同時期やそれより早い時期において、「バカ発見器」の使用が散見される。しかし、それらを実例にあたって検証した結果、(46)のようにTwitterの蔑称と判断できなかったため、今回の用例採集の対象からは除外した。

(57)はかなり早い時期での「馬鹿発見器」の使用例である。しかし、厳密には「地頭馬鹿発見器」という形態で使用されている点に注意を払う必要がある。また、(59)はリツイート（自分のツイートに他人のツイートを引用してすること）の中での使用例である。なお、この文面がリツイートされている用例を、(59)以外に2例確認できた（投稿／リツイート日はいずれも2010年3月13日）。

以上紹介した用例から、Twitterにおける「バカ発見器」という語の使用には、以下のような傾向が見いだせる。

(62)①2009年8月の時点で、Twitterの蔑称としての「馬鹿発見器」の使用例が観察される。ただし、この用例は厳密には「地頭馬鹿発見器」という形態で使用されている。すなわち、2009年8月時点では、「バカ発見器」という表現が固定化していなかったことが推察できる。

②「バカ発見器」が「安定的」に使用されるようになったのは、2010年に入ってからである。

③用例が観察され始めた時点から使用例が多く観察される（ただし、(58)や(61)は言及例と思われる）。

8. 本稿のまとめ

以上、5. 節と6. 節で、新聞・雑誌記事、「Yahoo! 知恵袋」、ブログ、Twitterにおける「バカッター」と、「バカ発見器」の早い段階での用例を紹介してきた。それぞれの場合のまとめについては、(14)、(19)、(30)、(38)、(45)、(50)、(56)、(62)を参照いただきたいが、本節ではそれらの個別のまとめを統合した全体的なまとめを行いたい。

各媒体における「バカッター」と「バカ発見器」の出現時期とその時期に観察された用例が使用例か言及例かについて、次ページの表3にまとめた。表3からは、以下のような傾向が読み取れる。

- ⑥③①Twitterの蔑称は、Twitterからブログ／「Yahoo! 知恵袋」、そして、新聞・雑誌記事へと広がっていった。ブログと「Yahoo! 知恵袋」については、ほぼ同時期にTwitterの蔑称が使用されるが、わずかにブログのほうが先行して使用される傾向も読み取れる。
- ②異なる言語資料にTwitterの蔑称が登場する際には、言及例が存在する場合がほとんどである。
- ③Twitterの蔑称としては、「バカッター」よりも「バカ発見器」が先行して使用される傾向にある。

表3 言語資料別Twitterの蔑称の初出時期一覧

	「バカッター」				「バカ発見器」「馬鹿発見器」			
	新聞・雑誌	知恵袋	ブログ	Twitter	新聞・雑誌	知恵袋	ブログ	Twitter
2009年								・8月： 「地頭馬鹿発見器」の使用例
2010年				・2月： 「ゲーム名」としての「バカッター」の使用例			・10月： 言及例と思われるものが1例	・1月～： 使用例
2011年			・夏～： 「2ちゃんねる」まとめサイトでの用例が観察される	・4月： 言及例／使用例		・6月～： 複数の言及例／使用例	・2月～： 複数の言及例／使用例	
2012年		・1月： 使用例1例 ・6月～： 複数の言及例／使用例	・5月～： 言及例／使用例		・11月： 言及例1例			
2013年	・1月： 言及例1例 ・8月～： 複数の言及例				・6月～： 複数の言及例			

以上、表3から読み取れた傾向から、⑥④のようなことが言えそうである・なお、⑥④の丸数字の結論は、⑥③の丸数字の傾向と対応している（たとえば、⑥④の①は、⑥③の①から導き出されるということである）。

- ⑥④①俗語性が高い言語資料はTwitterであり、逆に俗語性が低い言語資料は新聞・雑誌記事といえそうである。また、ブログと「Yahoo! 知恵袋」については、俗語性という観点からは、Twitterと新聞・雑誌記事の中間に位置するが、その両者の差異については、今回の分析結果からは明確な結論を出すことができない（強いて言うならば、ややブログのほうが俗語性が高いと思われる）。
- ②性格が異なる言語資料で使われている俗語が登場する場合には、まず、言及例として用いられる（改まり度が低い言語資料で話題になった語を紹介するという形とる）。
- ③Twitterの蔑称としての「バカッター」は言葉遊びの側面が大きい。一方、「バカ発見器」はTwitterのメタファー（隠喩。「ある事柄を、そのよく似た別の事柄を用いて表現すること」吉村公宏2004）である。Twitterは使い方に注意を要するツールで、Twitterには、それを使いこなせる能力がなければ（大）問題を引き起こすという目には見えない側面（認知言語学でいう「目標領域（target domain）」を、「バカ発見器」という具体的なモノ（認知言語学でいう「起点領域（source domain）」）にたとえることで、Twitterの性格を把握しやすくなる。それゆえ、単純な言葉遊びである「バカッター」よりも「バカ発見器」のほうが、先に生まれ、また、先に人口に膾炙したのだと考えられる³⁸⁾。

本稿の冒頭で述べた問題意識、すなわち、Twitterの蔑称である「バカッター」「バカ発見器」という語が、いつ、どこで生まれ、どのような過程を経て、一般紙に掲載されるようになったのかという点についての回答は⑥④の①と②に集約されたと思われるが、最後に、今一度まとめを行いたい。

表3からもわかるように、Twitter上から使用が広まった（さらにいうならば、③0、③8で見たように、

「バカッター」という蔑称は、「2ちゃんねる」から使用が始まったと考えられる）Twitterの蔑称の「バカッター」と「バカ発見器」は、「ネット集団語」³⁹⁾と言えよう。松田(2006)は、ネット集団語が生まれる背景の一つとして、インターネット上が「気兼ねなく言いたいことが言える場」であるということを指摘しているが、今回の調査結果に鑑みると、インターネット上でも「気兼ねなく言いたいことが言える」もの（「2ちゃんねる」、Twitter）と、比較的秩序が守られているもの（ブログ、「Yahoo! 知恵袋」）とに分けられそうである⁴⁰⁾。本稿の調査結果も踏まえると、少なくともTwitterの蔑称は、「気兼ねなく言いたいことが言える場」であるTwitter（や「2ちゃんねる」）上で、現実社会では口にしにくい「バカ」という罵倒語を利用するという「自由な発想を働かせ」（松田2006）て生まれ、それが「言い得て妙」とインターネットユーザの共感を誘い、面白がって、やがてはインターネット上の様々な場面（ブログや「Yahoo! 知恵袋」）でも使われるようになった、と結論付けることが出来そうである。

なお、(9)の新聞での指摘（「数年前からツイッターは「バカッター」などと称され」）は、表3を見る限りでは、正鵠を射ていることを、付記しておく。

9. 今後の課題

以上、本稿では、インターネット上の文書のうち、①新聞・雑誌記事、②「Yahoo! 知恵袋」、③ブログ、④Twitterという4種類について、それぞれ検索を行い、Twitterの蔑称が、俗語性の強い語が掲載されることが少ないと思われる一般紙に掲載されるに至る過程を素描してきた。その結果、前節に述べたような一定の結論を見出すことができたが、本稿の分析には課題がいくつか残っている。

まず、本稿の分析は、定量的な観点からの考察を行っていない、という点である。ここでいう定量的観点からの考察というのは、二つの意味がある。

一つは、Twitterの蔑称の初出時期と、初出時期における用例の実態の検討しか行っていないため、それぞれの蔑称の使われ方の推移を定量的に追うことをしていないという意味である。Twitterの蔑称が新聞・雑誌記事に掲載されるまでの変化を追うためには、Twitterの蔑称の使用実態を、経年的に、定量的な視点からの記述を行うことも重要であることは、重々承知している。ただ、この点については、検索のテクニックの問題（註30で触れたような、いわゆる検索の際の「ゴミ」をどう処理するかなど）や、5. 4. 節でふれたTwitter検索エンジンTOPSYの検索システムの問題に象徴される、検索エンジンの問題など、解決すべき課題が山積しており、今回は定量的な視点から、経年変化を考察することができなかった。

本稿でできなかった定量的観点からの考察の二つ目は、言及例と使用例の割合である。(64)の②では、俗語性が強い流行語・新語が、改まり度が高い文書に拡散する際には、まず、言及例が認められるとまとめたが、初出時期において、言及例数と使用例数を調べ、その時期においては本当に言及例数が多いのかを定量的に確かめる必要もある。しかし、本文中で確認したように、初出時期が数か月に及ぶものと1日で多数の用例が得られる場合があり、どの時期までを「初出時期」とみなすのかの認定基準を設けることが困難なため、本稿では、初出時期における言及例と使用例の割合を定量的に考察することはできなかった。

以上、二つの観点からの定量的考察は、問題点の解決法も含め、今後の課題としたい。

また、今回取り上げたTwitterの蔑称は、2013年10月時点で新聞・雑誌記事に確認された「バカッター」「バカ発見器」の二語のみであった。しかし、Twitterの蔑称には、それ以外のものも存在しているようである（今回、紹介した用例の中だけでも、「クソッター」(16)というものがあった）。そのような蔑称は、現時点では新聞・雑誌記事には掲載されていないが、今後、「バカッター」「バカ発見器」同様、いずれは新聞・雑誌記事に掲載されるのか、それとも現状のまま、インターネット上だけの使用にとどまるのかという問題、すなわち、どのような語が新聞・雑誌記事といった改まり度が高い文章に取り入れられるのかという問題は気になるところではある。しかし、この問題も検討するに至らなかった。この点についても、今後の課題であると意識していることを記し、本稿を閉じることにしたい。

10. 補説： 本稿の試みの教育的効果

本稿の調査1, 調査2は, 付記に記したように, 数日間という短期間で行った(行うことが出来た)。非常に短期間であるが, ここまで述べてきたように, Twitterの蔑称がどのように拡散していったか, 素描することは出来たように思う。

このことに関連して, 荻野ほか(2005)には, 以下のような指摘がある。

(65) コーパス日本語学の入門として, WWWを活用することは大いに効果がある。学生諸君は, ある意味で研究の入門者であるが, そういう人にとってWWWは身近にある資料として実に扱いやすい。言語および言語研究のおもしろさを実感するのにこんな便利なものはない。研究は, 長い時間をかけて苦しみながら行うものではなく, もっと手軽に実行し, おもしろいことを発見するべきである。そういう楽しさを経験することで, 言語研究に取り組む人が増えることは望ましいことである。

本稿における試みは, 「手軽に実行」でき, その結果, 「おもしろいことを発見」できたのではないかと考えている。そのような意味で, 本稿での試みは, 学生への言語研究, 日本語研究へ誘う具体例の一つとして活用できるのではないかと考えている。

また, 筆者が, 学生たちによるインターネットを利用した日本語研究, 中でも本稿や岡田(2013)で試みたような試みを期待する理由としては, 上述したような, 「手軽である」という側面の他に, もう一つ, 存在する。それは, 以下に述べるような理由である。

8. 節でも紹介した松田(2006)には, SNSでは集団語がほとんど採取できなかったと指摘したうえで, 以下のように述べている。

(66) これはSNSの歴史が浅いためだとも, また管理人の承認を必要とするような非公開のコミュニティでは集団語が発生している可能性も否定できない。異なるSNSで調査をする必要もある。SNSについては, まだまだ慎重な観察が必要なのである。

松田(2006)が書かれた頃は, 現在においてはユーザーが多いSNSであるTwitter, LINE⁴¹⁾は存在しなかった。また, facebook⁴²⁾も普及しておらず, SNSといえばmixi(詳細は註40を参照)の全盛期であった⁴³⁾。そのような時代に書かれた松田(2006)は, mixiを利用してSNSにおける集団語を対象とした考察を行っているが, 松田(2006)が書かれてから約7年経った現在, インターネット, 特にSNSの使用状況は激変している⁴⁴⁾。

松田(2006)は, ネット集団語研究は「新しい分野」であるため, 「先行研究に縛られることの少ない学部生レベルの, 研究者の意表をつくような発想で思わぬ発見が出ることも珍しくない」と指摘し, 「ネット社会やネットワーク科学」への「興味や知識を持った学生による斬新な研究」の登場することを期待している。筆者は, 松田(2006)が指摘するような観点に加え, 各種SNSを駆使して生活していると思われる近年の学生たちが, 各種SNSのヘビーユーザーならではの視点から, SNSも視野に入れた, インターネットを利用した言語研究, 中でも流行語, 新語研究が展開されることを期待しているのである。なお, インターネットを利用した言語研究の中でも流行語, 新語という語彙の側面における研究の新たな展開に期待するのは, 語彙は, その他の言語体系を構成する要素(音韻, 文法)と比較して, 情報化の影響を大きく受けやすいという指摘が存在するからである(井上史雄2005)。

付記1

本稿の調査時期(本文中に記載したURLのアクセス日)は, 以下のとおりである。

- ・ 6. 1. 節と7. 1. 節: 2013年10月29日
- ・ 6. 2. 節と6. 4. 節: 2013年9月14日
- ・ 7. 2. 節と7. 4. 節: 2013年9月15日
- ・ 6. 3. 節と7. 3. 節: 2013年11月9日

また, 上記以外の節に記載したURLは, 全て2013年11月9日に閲覧した。

付記2

本稿脱稿に発行された2014年度版の『現代用語基礎知識』（2013年11月発行）には、本稿の分析対象語であるTwitterの蔑称2語（「バカッター」と「馬鹿発見器」）が掲載された。その詳細は以下のとおりである。

- ・金田一秀穂氏執筆「世相語」の章に、「バカッター」が立項される。
- ・もり・ひろし氏執筆「流行観測」の章における「悪ふざけ投稿」の項目の解説文中に、「バカッター」、「バカ発見器」が言及される。

また、「2013年ユーキャン新語・流行語大賞」の「候補語50語」に、「バカッター」がノミネートされた（<http://singo.jiyu.co.jp/nominate/nominate2013.html>。2013年12月20日閲覧）ことも付記しておく（ただし、「バカッター」が「2013年ユーキャン新語・流行語大賞」を受賞することはなかった）。

註

- 1) この点については、4. 節での議論も参照のこと。
- 2) 論文の読み手に不快感を呼び起こす蔑称を研究の対象に取り上げること自体、適切ではないというご意見もあるかも知れない。しかし、現代日本語の語彙体系の中には蔑称が存在するのも事実である以上、現代日本語研究においても、蔑称を看過することは出来ないと考える。実際、この種の語彙、表現も、現代日本語研究の対象になっている。たとえば、国立国語研究所が企画、編集に深く関与していた一般向けの雑誌『言語生活』398号（1985年、筑摩書房）の特集のテーマは、「悪口」である（『言語生活』は1951年創刊、1988年休刊。創刊号から159号までは「国立国語研究所監修」、それ以降は国立国語研究所の所員によって構成された編集委員会が企画、編集を行った。詳細は、杉戸清樹2004を参照）。また、いわゆる「差別語」をめぐる研究は、多数存在する（論文としては、遠藤織枝1993・2005、岡本佐智子2009などが、具体的な語を挙げて記述、考察しており、参考になる）。いずれにせよ、不快感を呼び起こす語彙、表現も、現代日本語研究の対象であることをご理解いただければと思う。
- 3) この事実が意味するところとしては、『現代用語の基礎知識』の執筆担当者が以下のような認識を持っているという可能性が考えられよう。
 - ・Twitterの蔑称の存在に気づいていない。
 - ・Twitterの蔑称の存在に気づいているものの、使用範囲が極めて限定されているため、言及する必要はないと判断した。
 - ・Twitterの蔑称の存在に気づいているものの、出版物上で言及するのは憚られるとして言及しなかった。
- 4) 『現代用語の基礎知識』は、毎年11月に発行されている。すなわち、本稿執筆時（2013年10月）において参照できる最新版の2013年度版は、2012年11月に発行されたものである。
- 5) なお、Twitter日本版（<https://twitter.com/>）では、Twitterサービスが当初は、140字以内の投稿のことを「つぶやき」と称していたが（そのため、上記に引用した津田2009も「140字以内の『つぶやき』」という表現を使用している）、2009年10月以降、投稿のことを「ツイート」と称するように変更された（<http://www.itmedia.co.jp/news/articles/0910/26/news084.html>。2013年6月8日閲覧）。そのため、本稿では、以降、Twitterに投稿された140字以内の投稿のことを、引用の場合を除き、「ツイート」と表記することにする。
- 6) インターネット上の文章に観察される「間違い」については、荻野綱男（2009）が参考になる。荻野（2009）では、個人ホームページ、日記・ブログ、掲示板・BBS、企業・法人・団体のホームページ、政府や地方公共団体などの公的なページ、ニュースなどのサイト別に、漢字の読み方、漢字の使い方、複合語の表記に認められる「間違い」の用例数を報告している。
- 7) Twitterを対話的に使用するというを理解するためには、より少し詳しく、Twitterの説明をしなくてはならないかもしれない。

Twitterにツイートするためには、まず、無料のID登録を行う。その後、ログインした画面に表示される「ツイートする」という欄に、140字以内のコメントを記入し、「ツイート」というボタンをクリックす

る。そうすると、自分のタイムライン（「自分自身とフォローしている人のつぶやきが表示される」画面。津田2009）に、自分が投稿したツイートが表示されると同時に、そのツイートが全世界に公開される。

ここで言及している「フォロー」とは、「他のユーザーのつぶやきを自分のタイムラインに表示するように登録すること」（津田2009）である。つまり、自分が投稿したツイートをフォローしてくれているフォロワーのタイムラインにも、自分のツイートが即座に表示されるのである。そして、それを見たフォロワーが返信する、という対話的なやりとりがTwitterでは可能である、ということである。

8) なお、新潟大学教育学部の学生で、Twitterを使用しているという学生数人に確認したところ、必ずしも相手からの反応を期待せずにツイートしていると答える者が多かったことを付記しておく。

9) なお、ブログの日本語の諸特徴については、日本語学、国語教育の啓蒙雑誌『日本語学』（明治書院）の2007年4月号（第26巻第4号）の特集「ブログのことば」に収載されている諸論文が詳しいので、そちらもご参照いただきたい。

10) 詳細は、前川喜久雄・山崎 誠（2009）や、http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/などを参照。

11) 詳細は、前川喜久雄（2008）や、http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/などを参照。

12) 「連載小説、寄稿、図表等が紙面の多くを占める記事を除いた」（小磯ほか2009）とのことである。

13) 「1980～2005 年の会議」のうち、「原稿を単純に読み上げる会議をできるため避けるため、原稿読み上げ率の高いとされる本会議、短い会議・委員会（500 文以下）を除外してサンプルを選定した」（小磯ほか2009）とのことである。

14) 全く同様のサービスは、@nifty以外にも、以下の会社によって提供されている。

- ・ So-net: http://www.so-net.ne.jp/database/G-search/general/general_ohdan.html
- ・ G-Search: http://db.g-search.or.jp/g_news/info_db.html?id=RXCN
- ・ BIGLOBE: http://index.biglobe.ne.jp/info/news/ip_sks.html
- ・ eo: http://eonet.jp/eodb/data/g_news/rxcn.html

今回、筆者が@niftyを利用したのは、たまたま筆者が@niftyの会員だったという理由だけである。

15) 以前、このサービスを利用して「イケメン」という語の出現実態を調査したところ、新聞・雑誌記事の中でも、特にスポーツ紙に多く使用されているという結果を得ることが出来た（岡田祥平2012）。このことは、新聞、雑誌を利用して、新語、流行語の研究を行う際には、多種の新聞、雑誌にあたって用例を収集する必要性の傍証となろう。

16) 繰り返しになるが、註14で触れたとおり、同種のサービスがいろいろな会社から提供されているので、筆者は決して@niftyの利用を薦めているわけではない。

17) この問題に関しては、長谷川守寿（2011）の指摘を無視することが出来ないだろう。長谷川（2011）は、『CD-毎日新聞データ集』（日外アソシエーツ。詳細は<http://www.nichigai.co.jp/sales/mainichi/mainichi-data.html>を参照）と『毎日新聞縮刷版』とを比較した結果、紙媒体で発行された『毎日新聞縮刷版』に掲載されている以下のような記事が『CD-毎日新聞データ集』の方には掲載されていないことを指摘している。

- ・ 写真などの画像ファイル（『CD-毎日新聞データ集』の収録データがテキストファイルのみのため）。
- ・ 連載小説、四コマ漫画、風刺漫画、著名な作家・歌手・研究家などの署名入り記事など（著作権の問題があるため）。ただし、長谷川守寿（2013）には、「『CD-毎日新聞データ集』では、著作権の問題から含まれないと考えられていた小説の一部が、実際には収録されていたのである。しかも小説毎に収録の実態にはかなり違いがあり、全く収録がないものから、かなりの回数が収録されているものもある」という指摘もある。

なお、今回の調査で利用する「新聞・雑誌記事横断検索」においては、著作権の問題が解決していない記事（の一部?）については、見出し、タイトルのみが確認できる状態（検索可能な状態）にして、情報を提供しているようである。

18) 長谷川（2011）は、『CD-毎日新聞データ集』と『毎日新聞縮刷版』の間には、以下のような差異が認められたと報告している。

- ・見出し、記事本文に見られる違い： 算用数字（『CD-毎日新聞データ集』では全角＝2バイト文字、『毎日新聞縮刷版』では半角＝1バイト文字）
- ・見出しに多く見られる違い： 情報の追加、一部書き換え、記号の追加
- ・記事本文に多く見られる違い： 記号・助詞の追加・変更、記事本文の追加、記事本文の削除、記事本文の統合、文字コードによる表記の違い、括弧の不一致、全角空白文字の使用

長谷川（2011）で指摘された上記のような差異は、紙媒体のデータを電子化する際に生じる諸問題でもあるので、同様の問題が、今回の調査で利用する「新聞・雑誌記事横断検索」にも存在している可能性も大きいと考えられる。

19) 通常のインターネット検索エンジンも、言語研究用に設計されているわけではないので、不便な点も多い。しかし、google (<https://www.google.co.jp/>) に代表されるインターネット検索エンジンでは、様々な検索機能（プラス演算子、フレーズ検索、AND検索、OR検索、NOT検索、ワイルドカード検索など）を利用すれば、ある程度、言語研究用の検索も可能である（岡島昭浩2011、小野正弘2011などを参照）。しかし、今回の調査で利用する「新聞・雑誌記事横断検索」は単純な文字列検索しか出来ないため、言語研究に利用するには限界も存在する。たとえば、「AはBだ。」という文において、A、Bに入る単語を調べたい場合、インターネット検索エンジンではワイルドカード検索を利用すれば検索可能であるが、「新聞・雑誌記事横断検索」では検索不可能である。

20) 各媒体の検索対象可能期間は、http://business.nifty.com/gsh/RXCN/price_list.htmを参照。

21) 「時間的安定性」とは、同じ単語を検索すれば、検索日時が異なっても同様の検索結果が得られることを指す。また、「論理的整合性」とは、複数の語を検索する際、「検索窓」に入力した単語の順番を問わず、同様の検索結果が得られることを指す。詳細は、田野村忠温（2008・2009・2012）などを参照。

22) 岡島（2011）では、「gooブログ検索」（http://blog.search.goo.ne.jp/search_goo/）、「Google ブログ検索」（<http://www.google.co.jp/blogsearch>）、「まとめてブログ検索」（<http://hirashi.mydns.jp/metablogsearch/>）が紹介されている。ただし、岡島（2011）で紹介されているブログ検索エンジンの機能の中には、2013年10月現在では、使用できない機能もある。たとえば、岡島（2011）には「gooブログ検索」を使用すれば話者の属性（性別、年代、地域）による絞込が可能とあるが、2013年10月現在のgooのブログ検索には、地域による絞り込み機能は備わっていない。また、岡島（2011）が紹介している「はてな プロフィール検索」は2013年5月31日をもって廃止された（<http://hatena.g.hatena.ne.jp/hatena/20130524/1369361736>）。

以上のように、提供されている検索サービスは、コンピュータに詳しくなくても簡単に利用できるため、非常に便利なのであるが、突然、仕様が変更されたり、サービスの提供が停止されてしまったりするなど、研究に利用する際には問題点も存在する（5. 4. 節におけるツイート検索エンジンTOPSYについての議論も参照のこと）。このように、サービスの提供の安定性、永続性が保証されないという点は、検索エンジンのシステムの詳細が不透明なこととあわせ、言語研究にインターネット検索エンジンを利用する際の大きな問題点と言える。

23) 「gooブログ検索」でも任意の期間を指定して検索が可能であるが、「gooブログ検索」で期間を指定した検索を行うには、自分がブログを開設していて、なおかつgooにping（自分のサイトを更新した時、自動的に登録したサイトに連絡する機能のこと。たとえば、<http://bmasterb.com/477.html>を参照）を送らなければならない。すなわち、「gooブログ検索」で期間を指定した検索を行うには、自分がブログを開設している必要がある。

24) おそらく、「Googleブログ検索」は、googleの検索システムを採用していると思われるので、この問題が生じるであろうことは、容易に予想される（google検索の問題点は、田野村2008・2009・2012などを参照）。

25) (7)の①から③で指摘した問題点については、有料サービスであるTOPSY PROに入会すれば、解決するようである。ただし、「基本的には、企業がマーケティング目的で使うという方向性」（<http://researchmap.jp/jo3b8xzqh-10220/>）へのシステムとなったため、日本語研究に活用できるかは、未知数である。なお、TOPSY PROは14日間のトライアル期間中は無料で使用が可能であるが、筆者は14日間のト

ライアル期間中には、TOPSY PROの多用な検索機能を使いこなせなかったことを告白しておく。

26) ソーシャル・ネットワーキング・サービス (Social Networking Service) の英略称。「会員制のウェブサイトで職業・趣味・写真などを公開し、会員同士で交流できる機能を提供するサービス」(大月宇美 2013) のこと。

27) 2006年4月20日にファクタ出版株式会社より発刊された月刊の「総合情報誌」。詳細は、<http://facta.co.jp/outline/>を参照。

28) 「バカ発見器」については、7. 1. 節で触れる。

29) ⑬は、見出しから、社会学者の鈴木謙介氏が「バカッター」、および「バカ発見器」を使用したように思えるが、実際は鈴木氏へのインタビュー記事で、引用箇所は鈴木氏へのインタビューを試みる理由を記述した、いわば新聞記者の見解を記した箇所であることを付記しておく。

30) たとえば、「光ファイバカッタ」(2012年5月25日 建設通信新聞)、「サバカッター釣り」(2009年10月24日 スポーツニッポン)、「オメエ、バカッターってゆうのは親しみ込めてるだからなー」(静岡県焼津海岸部の方言。2006年9月26日 静岡新聞朝刊)など。なお、これらの例を見る限りでは、本稿で使用した新聞・雑誌記事横断検索サービスは、検索の際、語末の長音の有無は無視しているようである。

31) 「提携サイトまで含めると800を超える種々雑多の掲示板から構成される巨大掲示板サイト」のことで、「2ちゃんねる用語」と呼ばれる独特の言葉や言い回しなど「独自の文化を形成してきた」(大月 2013)。

32) 「2^{ch}の価値のあるスレッドを発掘し、意味のある情報のみを拾っている」(増田真樹2010) サイトのこと。

33) 註31でふれたとおり、「2ちゃんねる」は800を超える掲示板が存在するが、その各々の掲示板では、話題別、テーマ別、トピック別に書き込みが展開されている。その話題、テーマ、トピックの「流れ」のことを「スレッド」という(増田2010なども参照)。

34) 「バカ発見器」については、7. 1. 節で触れる。

35) ②で言及されているスレッドは、別のまとめサイト (<http://yutori2ch.blog67.fc2.com/blog-entry-3002.html>)。投稿日は2011年8月10日。投稿時間は不明)でも取り上げられて、その中に、「バカッターってまた上手いことを」という書き込みが見られる。この記述は言及例であると同時に、この書き込みからは「バカッター」という蔑称は、2011年8月時点での「2ちゃんねる」では、新鮮味を持って使用されていたことが窺える。だが、③で言及されているスレッドには、「この件に限らず著名人に絡むバカッター民の心理ってどんなもんなんだろ」「バカッターやってる奴は相手にしない方が良い」という書き込みが見られる。これらの用例は言及例ではなく使用例である。すなわち、2011年10月時点では、「2ちゃんねる」においては、「バカッター」という語が定着しつつあることが窺える。

36) なお、5. 4. 節で説明した手法で検索の結果、③の用例よりも古い日時の用例も1例ヒットした (https://twitter.com/tsuduru_3/status/9382909855)。しかし、2013年9月14日時点でツイートは削除されており、ツイートされた日時の詳細は確認できなかった(TOPSYでの検索結果画面ではツイートされた日時は、たとえば、「4 years ago」とおおよその情報しか表示されない。ツイートされた日時を正確に把握するためには、TOPSYの検索結果画面を経由して実際のツイートを確認する必要がある。したがって、削除されたツイートについては、ツイートされた正確な日時を把握することが不可能なのである)。

37) この「www」は笑いを意味するインターネット用語、Twitter用語である(『三省堂国語辞典第七版』2014年1月刊の「ダブリュー」の項の④などを参照)。

38) さらにいうならば、「メタファーには文化における価値観を反映するばかりでなく、価値観を作る」(吉村2004)側面があることが指摘されていることにも留意したい。すなわち、「バカ発見器」というTwitterの蔑称が生まれる前には、Twitterは、その使い方によっては大問題が起きるものであるという概念が存在していなかったという可能性もある、ということである(メタファーと価値観の関係については、吉村2004など、認知言語学の入門書を参照のこと)。

39) 松田謙次郎(2006)による用語で、「インターネットを仲介して繋がった人々がネット上の掲示板、メール(含メーリングリスト)、チャットなどで交流するうちに発生した集団語」を意味する。なお、

「集団語」の定義については、松田（2006）や、松田（2006）が記載されている『日本語学』Vol.25No.16（2006年。「特集 ネット社会の集団語」）に掲載されている諸論文などを参照のこと。

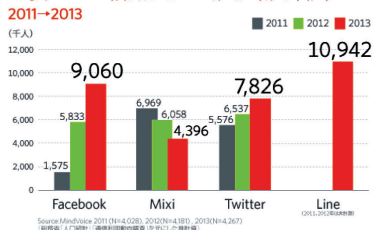
40) この点については、松田（2006）は「mixi（ミクシイ）」を例に挙げて、考察を試みている。mixiとは、「国内の代表的なSNS」で、「日記やコミュニティ、ミクシイ上でゲームやアプリケーションを利用できる「mixiアプリ」、つぶやき機能の「mixiボイス」などのサービスが提供されている」（大月宇美2012）が、松田（2006）は「ミクシイで筆者が参与観察を行い、また周囲の複数ユーザにも聞いて判明したことは、ミクシイでは集団語がほとんど集団語が存在しない」と指摘している。その理由として松田（2006）は、「ミクシイではすべての参加者が誰かの紹介を通じて参加して」いるため、「書き込みが一概に丁寧になり、ネガティブな、人を傷付けるような書き込みがしにくく」、「生き生きとしたレスの交換に欠け、全体としておとなしい」状況になり、「集団語が生まれにくくなるのではないかと推測している。

41) LINEとは、「主にスマートフォン向けの通話、チャット、メールなどのコミュニケーション用アプリ」で、「スマートフォンでも携帯電話でも、機種や通信会社にかかわらず基本的で無料で利用できる」（大月2013）という特徴を持つ。

42) facebookとは、「実名での登録を推奨し、2004年にアメリカの学生同士のつながりから開始された、世界最大の会員数を誇るSNS」（大月2013）のこと。

43) 「ブランドコンサルティング会社の株式会社リスクブランド」が毎年5月に行っている「SNS活用者動向」調査によると、2013年5月時点のSNSの活用者人口は、次頁の付図のとおりである（http://www.riskybrand.com/report_130724/）。この調査はインターネット調査で、どこまで妥当性があるか議論はあろうが、ユーザーが2006年6月現在でユーザーが「毎日一五、〇〇〇人の割合で増加している」（松田20069）といわれたmixiが、facebookやTwitter、LINEといった他のSNSの登場により、退潮現象にあると言ってもよいのではないかと推測している。

主要SNSの活用人口の推移(推計値)



2013年5月における各SNSの利用者数

- 1位 LINE (1,094万人)
- 2位 Facebook (906万人。この2年で5.8倍に増加)
- 3位 Twitter (783万人。この2年で1.4倍増加)
- 4位 mixi (440万人。この2年で37%減少)

付図 主要SNSの活用人口の推移(推計値) (http://www.riskybrand.com/report_130724/より)

なお、『現代用語の基礎知識』における「mixi」の記載、言及状況は次ページの付表のとおりであるが、「mixi」が『現代用語の基礎知識』で初めて言及されたのは2005年版である。また、2009年版の時点で「mixiの停滞」という項目が立項されている点には注目に値しよう。

44) 井上史雄（2005）は、従来の言語研究は、ラジオ、テレビ、そしてインターネット（携帯電話、電子メール）が言語に与える影響を考察してきた、とまとめている。しかし、現代の情報化は「秒進分歩の世界」（井上2005）ゆえ、インターネットの世界の中心も、携帯電話、電子メールの時代から、スマートフォン、SNSの時代に変容しつつある。したがって、これまでの言語研究の潮流も踏まえると、今後は、スマートフォン、SNSと言語の関係を研究する試みが大いになされることが期待されよう。

参考文献

石川慎一郎（2008）「言語コーパスとしてのWWW一広がる可能性―」『日本語学』Vol.27No.2

井上史雄（2005）「情報化と若者の言語行動」橋元良明（編）『講座社会言語科学【第2巻】メディア』

ひつじ書房

遠藤織枝（1993）「差別語・不快語の流れと今」『国文学 解釈と教材の研究』第38巻

遠藤織枝（2005）「差別語・不快語の60年」中村 明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子（編）『表現

付表 『現代用語の基礎知識』における「mixi」および関連用語の掲載状況

	「インターネット」の章 ※大月宇美氏執筆	「メディアと社会」の章 ※水越伸氏執筆	その他の章
2005年版			○別冊の「Webの文法」の章（四釜裕子氏執筆）で「mixi」が立項。 ○別冊の「カタログペディア」の章（執筆者不明）で「mixi（ミクシィ）」が立項。
2006年版	・「ソーシャルネットワーキングサービス」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。	・「ソーシャル・ネットワーク」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。	
2007年版	・「ソーシャルネットワーキングサービス」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。	・「ミクシィ疲れ」の項にて「ミクシィ（mixi）」に言及。 （○「ミクシィ疲れ」が立項。）	○「今から始めるブログ・SNSマニュアル」（岡部敬史氏執筆）の章で「mixi（ミクシィ）」が立項。 ・「ウェブのことば」の章（「はてなダイアリー」*の利用者によって編集）の「mixi疲れ」の項にて「mixi」に言及。 （○「ウェブのことば」の章で「mixi疲れ」が立項。）
2008年版	・「ソーシャルネットワーキングサービス」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。	・「ミクシィ疲れ」の項にて「ミクシィ（mixi）」に言及。 （○「ミクシィ疲れ」が立項。）	
2009年版	・「ソーシャルネットワーキングサービス」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。	・「ミクシィの停滞」の項にて「ミクシィ（mixi）」に言及。 （○「ミクシィの停滞」が立項。）	
2010年版	○「mixi（ミクシィ）」が立項。		
2011年版	○「mixi（ミクシィ）」が立項。		
2012年版	○「mixi（ミクシィ）」が立項。		
2013年版	・「ソーシャルネットワーキングサービス」の項にて「mixi（ミクシィ）」に言及。		

*発行当時のアドレスは
<http://www.hatena.ne.jp/>。
 現在のアドレスは<http://d.hatena.ne.jp/>

※ ○印：立項されている場合 ・印：立項されておらず、別後の解説文中にて出現した場合

※※ 「」内は、立項されている場合は見出しの表記、本文中での言及の場合は出現した表記（アルファベット表記の頭文字の大小文字小文字の違いもママ）。

※※※ 「mixi」は（「Twitter」の場合は異なり）「外来語・カタカナ語」の章では一切扱われていない。それは、「mixi」が日本で生まれたサービスであり、「外来語・カタカナ語」ではないという判断が働いているためだとも思われる。

と文体』明治書院

大月宇美（2012）「インターネット」『現代用語の基礎知識2012』自由国民社

大月宇美（2013）「インターネット」『現代用語の基礎知識2013』自由国民社

小野正弘（2011）「ウェブ検索概論」荻野綱男・田野村忠温（編）『講座ITと日本語研究6 コーパスとしてのウェブ』明治書院

岡島昭浩（1997）「インターネットで調べる」『日本語学』Vol.16No.2

岡島昭浩（2011）「ウェブ検索の応用」荻野綱男・田野村忠温（編）『講座ITと日本語研究6 コーパスとしてのウェブ』明治書院

岡田祥平（2012）「インターネットを利用した「新語」・「流行語」の定量的研究の試み―「イケメン」小考、ほか―」第297回日本近代語研究会時配布資料（2012年11月2日。富山大学）

岡田祥平（2013）「Twitterを利用した新語・流行語研究の可能性―アイドルグループ「Sexy Zone」の略語を例に―」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第6巻第1号

岡本佐智子（2009）「「不適切な」日本語表現考」『北海道文教大学論集』第10号（http://libro.dobunkuyodai.ac.jp/research/treatises_10.htmlにて閲覧可能）

荻野綱男（2007）「コーパスとしてのWWW検索の活用」『言語』Vol.36No.7

荻野綱男（2008）「WWWをコーパスとして利用する研究一文系と理系の観点から」『日本語学』第27巻第2号

荻野綱男（2009）「コーパス中の日本語の間違い」『特定領域研究「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』（http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/doc/workshop/JC-G-08-03.pdfにて閲覧可能）

荻野綱男・加藤 彩・本多さやか・谷口香織（2005）「WWWの検索による日本語研究」『東京女子大学日本文学』第101号

- 荻野綱男・末永絵梨・下重秋弓・三好亜萌（2007）「WWWの検索による日本語研究(2)」『東京女子大学日本文学』第103号
- 小磯花絵・小木曾智信・小椋秀樹・宮内佐夜香（2009）「コーパスに基づく多様なジャンルの文体比較－短単位情報に着目して－」『言語処理学会 第15回年次大会 発表論文集』（http://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2009/pdf_dir/P2-32.pdfにて閲覧可能）
- 杉戸清樹（2004）「言語生活」独立行政法人国立国語研究所 第24回「ことば」フォーラム配布資料（http://www.ninjal.ac.jp/archives/event_past/forum/24/haihu_24.pdfにて閲覧可能）
- 滝沢直宏（2007）「巨大データの必要性－言語の周延的・慣習的側面を探るために」『言語』Vol.36No.7
- 田中ゆかり（2003）「ネット検索は言語の研究に有用か」『日本語学』Vol.22No.5
- 田野村忠温（2000）「電子メディアで用例を探す－インターネットの場合－」『日本語学』第19巻第6号
- 田野村忠温（2008）「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価－Yahoo!とGoogleの比較を中心に－」『計量国語学』26巻5号
- 田野村忠温（2009）「日本語研究の観点からのサーチエンジンの比較評価・統一検索ヒット件数の時間変動のその後とWeb文書料の推計の修正－」『計量国語学』26巻8号
- 田野村忠温（2012）「日本語研究の観点から見た昨今のサーチエンジン事情－GoogleとYahoo!の技術提携の結果－」『計量国語学』28巻5号
- 津田大介（2009）『Twitter社会論 新たなリアルタイム・ウェブの潮流』洋泉社
- 長谷川守寿（2011）「新聞紙面と新聞記事データ集の相違について」『人文学報』No.443
- 長谷川守寿（2013）「「CD-毎日新聞データ集」に含まれるデータの特徴と使用上の注意点について」『人文学報』No.473
- 前川喜久雄（2007）「コーパス日本語学の可能性－大規模均衡コーパスがもたらすもの－」『日本語科学』22
- 前川喜久雄（2008）「『日本語話し言葉コーパス』の設計と実装」『日本語学』Vol.27No.5
- 前川喜久雄・山崎誠（2009）「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』」『国文学解釈と鑑賞』第74巻1号
- 前田広幸（2011）「ウェブと他のコーパスとの比較」荻野綱男・田野村忠温（編）『講座ITと日本語研究 6 コーパスとしてのウェブ』明治書院
- 増田真樹（2010）『ツイッター情報収集術』翔泳社
- 松田謙次郎（2006）「ネット社会と集団語」『日本語学』Vol.25No.10
- 吉村公宏（2004）『はじめての認知言語学』研究社